百鬼夜行圖、傳一休筆佛鬼軍の如き、また頗る珍什と爲すべきなり。

十王の說は、諸經律論中に其の說なき所、『佛祖統紀』第三十三(致九紙)に、十王供の事を記して「世傳。唐道明和上。神遊地府。見十王分治亡人。因傳名世間。人終多設世供」とあるに依れば、其の信仰は蓋し唐末宋初の頃に起れるものなるべし。從て其の圖像の流傳も、地獄變に比して稍後れたり。京都二尊院藏吉光筆十王繪、下野稱念寺藏畫者未詳十王變相圖、京都淨福寺藏光信筆十王圖の如き、蓋し其の作の優なるものゝ一なる可し。

五、十六羅漢十八羅漢五百羅漢　蓋し十六羅漢の名は、唐玄奘三藏の譯せる『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』に始めて出づる所なれば、此等羅漢像が、唐以後に於て畫作さるゝに至りしものなるは勿論なりと雖も、其の盛に行はるゝに至りしは、唐末五代の交に世に在りし禪月大師貫休の功なる可し。而して此の羅漢の眞像を我國に始めて傳へたるは、東大寺奇然大德なるが、卽ち『百錬抄』第四永延元年二月十一日の條に依るに、

入唐僧奇然歸朝。隨身第三傳釋迦像。十六羅漢繪像。幷摺本一切經。到蓮臺寺。大臣公卿已下。立車奉拜之。

と云へり。一條天皇の永延元年は、宋太宗の雍熙四年(皇紀一六四七)にして、貫休の示寂せる後梁太祖乾化二年(醍醐天皇延喜十二年皇紀一五七三)より勘算して、其の間僅に七十五年を經たり。又『元亨釋書』第十三俊芿傳に依るに、

芿將來十八羅漢像者。開化寺比丘尼正大師之所施也。正語曰。見師之相貌。宛似第十七慶友尊者。恐公非凡。故貺此圖。願歸本土。令人瞻焉。

と記し、泉涌寺俊芿法師が、十八羅漢像を賚來せる消息を載せり。俊芿は順德天皇の建曆元年二月(南宋寧宗嘉定四年皇紀一八七一)を以て宋より歸來せるものなり。案ずるに、唐末禪月大師以後、羅漢眞像を畫くこと大に流行し、爾來屢我國に輸入せられ、或は之を模して畫作するものあり。從て該羅漢像の名品の現在遺存するもの亦尠なからず。嵯峨清涼寺藏奇然請來十六羅漢像、高橋是清氏藏禪月大師筆十六羅漢像(元金澤稱名寺藏)京都高臺寺藏傳禪月大師筆十六羅漢像(元泉涌寺藏俊芿請來)常陸金龍寺藏李龍眠筆十六羅漢像、京都東海菴藏筆者未詳十六羅漢像、同相國寺藏陸信忠筆十六羅漢像、鎌倉建長寺藏顏輝筆十六羅漢像、建仁寺藏良詮筆十六羅漢像等の類、卽ち其の例なり。本邦畫工の手に成るもの、竝に山門安置の木像等の類に至つては、其の數實に枚擧に遑あらざるなり。

五百羅漢のことは、經律の中に確たる本說及び名義を見ず。是れ近古支那坊間に起れる信仰に本づくものなるが如し。是れ亦京都大德寺藏林庭珪周季常等筆五百羅漢像、同東福寺藏兆殿司筆五百羅漢像、鎌倉圓覺寺藏傳張恩恭筆五百羅漢等の古畫を始め、近代の製作に係るものとしては、東京增上寺藏狩野一信筆五百羅漢像、深川本誓寺藏菊地容齋筆五百羅漢像等あり。又鎌倉光明寺に陸信忠筆と傳ふる十九羅漢像十九幅を珍藏せり。

六、山水屏風扇面寫經其の他　東寺、高雄、醍醐、高野山等の眞言宗の諸大寺に、山水屏風と稱し、山水を畫ける屏風あり。高雄山の光景又は唐玄宗帝宸遊の圖等を畫けり。但し此は灌頂又は曼荼羅供等の道場に用ゆる所のものにして、通途世間の屏風とは全く其の用を異にするものなり。そは兎角として古代の山水の繪樣を研究せんとするものにとりては、蓋し屈强の材料たるは事實なりとす。

扇面形の料紙に種々の繪樣を畫き、彩色を施し、金銀の切箔を押し、砂子などを撒じたるものに、『法華經』を書寫せるもの、大阪四天王寺、坂本西敎寺等の寶庫にあり。是れ嚴島神社藏平家納經と相竝て、實に結構を極めたる寫經と云ふ可し。又京都神光院の珍藏にかゝるものに、下繪ある料紙に『金光明經』を寫せるものあり、又陸中平泉中尊寺に藏する金光明最勝王經曼荼羅は、經の本文を以て塔形を書し、其の周圍に經中所說の事相を圖繪せり、是れ亦稀世の珍什なりとす。

七、緣起繪詞　寺社緣起、祖師傳記等を繪卷として製作することは、蓋し平安朝の末頃より漸く流行するに至れるものゝ如く、現存せる遺物としては、傳鳥羽僧正筆『志貴山緣起』を壓卷とし、爾後鎌倉時代南北朝時代を經、室町時代に至りて、頗る盛に行はれたり。案ずるに寫經にして繪卷たるものに、天平時代の書寫にかゝる『過去現在因果經』あり。又三條天皇の永觀頃に源爲憲の作れる『三寶繪』は、今は詞書のみ傳はれるも、製作の當時には、一々挿畫ありたり。さればかゝる緣起繪卷の製作の由て起る所遠しと云ふ可し。但し平安末鎌倉時代以後に至て、大に之を流行せしむるに至りたるに就きては、當時の入宋者が華嚴變相等の繪卷類を請來せしことの如きも、確に其の一因なる可しと考へらるゝなり。而して此等の緣起繪詞類は、孰れも當時の佛敎美術を代表する優秀なる作物なるが、此の中亦自から靈像又は寺社の緣起を記せるもの、祖師等の行狀を圖繪せるもの等の別あり。前記の『志貴山緣起』を始め、『華嚴五十五箇處繪卷』、『嵯峨釋迦緣起』、『春日權現驗記』、『華嚴緣起』、『北野天神緣起』、『當麻曼荼羅緣起』、『東征傳繪卷』、『一遍上人繪卷』、『矢田地藏緣起』、『拾遺古德傳』、『法

然上人行狀繪圖』『頰燒阿彌陀緣起』『高野大師繪詞』『粉川寺緣起』『清水寺緣起』『石山寺緣起』『誓願寺緣起』『融通念佛緣起』『淨土五祖畫卷』『二尊院緣起』等の類、名什頗る多數にして、今具に玆に列記するに違あらざるなり。

第拾篇　日本淨土教美術小史

第一章　序說

一、淨土教美術の淵源　淨土と云ふ言葉は、弘く餘佛にも通ずる故、藥師淨土、彌勒淨土、補陀落淨土なども、其の內に含まるべき筈であるが、予がこゝに云ふ所の淨土教とは、左樣な廣い意味ではない。唯彌陀一佛を中心とした淨土の一門に關するもの、即ち古來弘く世に流傳された、阿彌陀佛に對する信仰と、其の信仰の發露したる美術的作物との關係、一口に云へば、淨土教に現はれた美術といふ樣なことに就て、其の歷史的變遷の跡を討ねて見たいと思ふのである。

抑彌陀淨土教は、『無量壽經』、『觀無量壽經』、『阿彌陀經』等を其の根本聖典として成立されたものであるが、既に淨土教が此等の經典を基礎として組織せられて居る以上は、其の淨土教に依て起つた美術が、更に本源に立ち戻つて、彼の『無量壽經』『觀無量壽經』などゝ密接な關係を有するは當然なことである。淨土教美術の淵源は那處にありやといはゞ、淨土教の本典たる『無量壽經』等にありと云はざるを得ない。就

中『觀無量壽經』の影響が、最も重きをなして居るので、作物の大部分は、謂ゆる『觀無量壽經』美術である。極樂淨土の有樣を畫いたもの、臨終迎接の次第を現はしたもの、孰れも皆『觀無量壽經』に據らざるはない。試に原初の淨土教に現はれた美術とは、どんなものであつたらうと云ふと、今『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』の三部を竝べた所では、淨土の莊嚴、來迎の瑞相、共に其の說明は『觀無量壽經』が一番に詳しい。而して其の『觀無量壽經』に說いてある十六觀中の第十觀音菩薩の條に、

頂上毗楞伽摩尼寶。以爲天冠。其天冠中。有一立化佛。高二十五由旬。

と說き、同第十一觀の勢至菩薩の條には、

此菩薩天冠。有五百寶蓮華。一一寶花。有五百寶臺。一一臺中。十方諸佛淨妙國土廣長之相。皆於中現。頂上肉髻。如鉢頭摩華。於肉髻上。有一寶瓶。盛諸光明。普現佛事。

と明してある。是は淨土教美術として、最も注目し置くべき要文である。淨土の光相に就ては『阿彌陀經』中にも可なり詳しい說明があり、今の『觀無量壽經』の說亦委曲を極めて居るが、但し此等の世界莊嚴の說明たるや、餘の經典に類似の記事が澤山にあるし、必しも彌陀淨土に局られたものではない。『阿彌陀經』の極樂界に對する記述が『大善見王經』の說相と一致するからと云ふて、兩經に關する議論が矢釜しかつたこともあるが、寧ろ彼が如き形容の文字は、忉利天や、四天王天等の說明にも採用せられ、所謂月並式の修辭であるゆゑ、それが彫刻や繪畫に現はれたからとて、本尊問題を別とするときは、是れと云ふ特異な點を見出し難い。去り乍ら前記『觀無量壽經』の說となると、是れは純然たる淨土教のみの所說である。阿彌陀如來補處の薩埵として、觀音大勢至の二菩薩が侍したまうとの說は、『無量壽經』成立當時以來の說であつて、其の由來する所、古く且つ遠いのであるが、それが『觀無量壽經』に於て此等三尊の尊容が詳說せらるゝに當り、特に觀音には冠中に化佛、勢至には肉髻上に寶瓶があるとの指示を得た。卽ち此の經の說に依て、彌陀の極樂世界には、此等特殊の表示を有する二菩薩が在すことを認め得ると同時に、所謂淨土教美術なるものが、何時までも此の特長を失はずに發達をして居る。一例をいへば觀無量壽經第十四觀の文に

觀世音菩薩。執金剛臺。與大勢至菩薩。至行者前。阿彌陀佛。放大光明。照行者身。與諸菩薩。授手迎接

とある。後世來迎の瑞相を畫くもの、其の觀音を現はすに、同じく頂載化佛冠若しくは執金剛臺を畫くを定例とする如きである。

『觀無量壽經』の翻傳せられたのは劉宋代であるが、今極樂淨土を畫いた作物として、餘り古い物は殘つて居らぬ。故に現在の遺品を捉へて論ずるにも、支那六朝時代までと云ふた樣な古い時代に遡ることは出來ない。たゞ『觀無量壽經』の文の上から見て、經自らが明す所の彌陀淨土を考へ、若しそれに隨伴して或種の作物が行はれたとすれば、それは恐らく其の經の說相と一致するものであつたらうといふことを想像し得るに過ぎないのである。然し冠中に化佛を頂載した觀音、否觀音といふ觀音は、顯密の孰れを問はず、之を以て此の菩薩を代表する標章として居る所から見ると、今の『觀無量壽經』の記事は、其の根底が非常に深い。思ふに後世祕密佛敎の本尊たる大日如來が五佛寶冠を戴いて居ることなぞも、其の思想の淵源は、今の觀音の、寶冠などから轉じて來たものであらう。之を要するに淨土敎美術は、其の正依の經典たる『無量壽經』『觀無量壽經』等を本として興起したものであるが、其の中『觀無量壽經』が、最も重大な影響を及ぼした。而して中古以後のものには『十往生經』といふ隋唐頃に撰出された一僞經が、大分其の作物と親緣を結んで居るのである。

二、淨土敎美術の種類　美術に現はれた淨土敎言葉を換へて云へば、淨土敎信者に依つて作られた信仰上の作物、それにも色々の種類があるが、試みに其の種目を分けて見ると、

一本尊阿彌陀如來　其の尊容必ずしも一樣でない。淨土變相中の彌陀と、兩界曼荼羅中の彌陀と云ふた樣に、單に印相などを異にし給ふばかりでも、猶ほ後代九品彌陀と稱して、九品の機類相應の彌陀如來像などがある。其の他密敎で傳へて居るものに紅顏梨色の阿彌陀といふがあり、又眞宗の本尊は是れ赤光背等に於て一新形式を示して居る。

二淨土變相　卽ち阿彌陀如來極樂淨土の勝相を圖に現はしたもの、智光曼荼羅、當麻曼荼羅、淸海曼荼羅と云ふた樣な極樂世界の莊嚴瑞相、竝に中尊敎主阿彌陀如來を始め、往生人の有樣まで畫かれてあるもの。

三阿彌陀曼荼羅　此は密敎所傳のもので、彼の當麻曼荼羅の類とは、全く其の趣を異にし、彼の變相には寶樹、寶池、寶樓閣に至る迄、巨細に圖示されてあるが、此には普通密敎所傳の兩界曼荼羅其の他の諸曼荼羅と同形式のもので、彌陀を中心とし、其の周圍に若干の菩薩諸尊を圖寫安置して建立したものである。此の種類の曼荼羅中、五通曼荼羅と稱せらるゝは、彌陀の周圍に觀音、勢至、地藏、龍樹を安置したもの、又惠運僧都が入唐請來せられたものに阿彌陀九品曼荼羅といふものがある。八葉蓮

華の臺上に上品の彌陀を安じ、その八葉に餘の八品彌陀、內院の四隅に法利因語の四菩薩、第二院に十二光佛、竝に四攝外四供、第三院に廿四菩薩、之に內院の法菩薩を算して計二十五菩薩を敷列しあるとのことであるが、後世九品彌陀、十二光佛、廿五菩薩等の思想竝に圖相等が盛に世の中に流布さるゝ樣になつたのは、此の種曼荼羅の流傳に本づく所尠なくないのかも知れぬ。

四聖衆來迎相　二十五菩薩、又は三尊來迎圖といふ樣な者、山越の彌陀なども、其の一に計ふべき者であるが、本朝に於て平安朝以來盛に行はれた。而も此種の聖衆來迎圖は、新古に拘はらず、孰れも皆惠心僧都の筆として傳へられつゝある所から考へると、此等はみな惠心僧都が、淨土變相や九品曼荼羅などを參考し、經文の說相に合して、始めて畫かれたものであるかも知れぬ。惠心作の和讚として世俗に流布さるゝものに、來迎和讚と廿五菩薩迎接讚との二篇あるが、前者は山越如來圖、後者は廿五菩薩圖に就ての讚歌である。已下此等の淨土敎史上に現はれた美術上の遺品に就き、其の歷史的變遷の次第を一通り說述する考へである。

第二章　奈良朝以前の淨土變相

一、緒言（附隋唐及び其以前の淨土變）

飛鳥時代の淨土敎美術として傳ふべきものに、中宮寺の天壽國繡帳、法隆寺金堂壁畫の阿彌陀淨土、御物金銅押出像、元興寺智光の淨土變相などがある。今此等の諸項を說明する前に、記述の順序上、何故に斯樣な淨土變相が行はるるに至つたかといふことゝ、其の支那に行はれた最初の淨土變に就き、一言して置きたい。

阿彌陀淨土變が、願生淨土の爲に作られたものであることは申すまでもないが、それには、作者自身之を以て觀佛の便とし、其の往生の行業を勤修する助にしたものであることを知らなくてはならぬ。彼の釋迦牟尼佛が耆闍崛山に於て、多寶佛と共に七寶塔中に坐し、十方分身化佛、所移衆生國土の中に遍滿すと觀ずる法華三昧觀法の所對として、靈山淨土變が作らるゝに至つたと同樣に、阿彌陀佛及び其の淨土の莊嚴等を觀念する爲に、遂に極樂世界の勝相を圖するものを出す樣になつたのである。斯くて阿彌陀佛を觀ずる法を明した『觀無量壽經』等に依て、佛竝に其の國土の莊嚴光相が畫かれた。是れ卽ち淨土變相である。

淨土の經敎の支那に翻傳せられたのは、古く後漢の時からであり。東晉慧遠が廬山に蓮社を結した頃以來は、敎としても廣く世に流布せられた。阿彌陀佛を念じて、極

樂往生を願つた人も尠なくはなかつた。而して六朝時代に於ける繡像、織絨像等の流行などから推考するときは、此の淨土變相の如きも早く世に行はれて居つたのかも知れぬが、古い所には、予は未だ史乘に其の明徵を得ない。僅に梁以後隋唐頃にかけ、一二の消息を得たのみである。卽ち梁沈約圖寫の安養世界相と、隋明憲の阿彌陀佛五十菩薩像と、唐善導の淨土變相などである。

梁沈約圖寫の安養國土のことに就ては、外に何も資料はないが、沈約自身の書いた『阿彌陀佛銘』の文が傳はつて居る。左に其の全文を紹介しよう。

法身無像。常住非形。理空反應。智滅爲靈。窮寂震響。大夜開冥。眇哉遐壽。非歲非齡。物愛彫絲。人榮寶飾。事儉欲興。情充累息。至矣淵聖。流仁動惻。順彼世心。成茲願力。於惟淨土旣麗且莊。珉路異色。林沼焜煌。靡胎靡娠。化自餘方。託生在焉。紫蒂青房。眷言安養。興言遐適。報路雖長。由心咫尺。幽誠曷寄。刊靈表迹。髣髴尊儀。圖金寫石。隨柁玉沙。乍來乍往。玲瓏寶樹。因風發響。願遊彼國。晨翹暮想。七珍非羨。三達斯仰。

此の文だけでは、圖相も能くは解らぬが、國土の莊嚴は勿論、行者往生の相まで畫かれたものゝ樣に思はれる。

阿彌陀佛五十菩薩像と云ふは、昔し天竺鷄頭摩寺の五通菩薩が、現身に極樂世界に往き、親しく阿彌陀佛を拜して、娑婆の衆生、淨土に生ぜんと願ずるものゝ爲に、佛の尊容を拜するを得せしめんことを請ふた時に、佛乃ち菩薩を其の本寺に還らしめ、寺の樹葉上に於て其の容を現じたまふた。一佛五十菩薩、蓮華に坐したまうて居たのを、菩薩葉を取りて、ありのまゝに圖寫し、遠近に流布したものであると云い傳へらるゝもので、隋の文帝の時、僧明憲が、高齊の道長法師から、此の一本を得て、廣く宇內に圖寫し流布した。其の中北齊の畫工曹仲達の畫けるもの等は、仲々丹青の妙を盡して居たとの事である。『惠什抄』等には、此の畫像のことを同じく阿彌陀曼荼羅の一種とし、五十二身像と名づけて居る。『覺禪鈔』には、圖まで揭げられてあるが、それは樹上に五十二佛身の坐し給へる有樣を、書いたもので、『法苑珠林』の說とは、少し其の趣を異にして居る樣である。

唐の善導大師が、淨土變を畫いたと云ふことは、有名な話しで、『淨土往生瑞應傳』にも、旣に「寫彌陀經十萬卷。畫淨土變相三百鋪」と云ふて居る。『龍舒淨土文』第五、『佛祖統紀』第三十九、貞觀十五年の條にも、今と同じ記事が載せてある。此の善導の淨土變が飛鳥時代の作物と交涉を有するものか如何といふは、彼我の時代に鑑みて少々考へ物であるが、彼の法如の淨土變に至つては、恐らく彼の變相を模したものではある

まいか。或學者は、彼の法如の變相は、藕糸にも非ず、中將法如のお手織にも非ず、蓋し往時舶載の唐製織絨佛像の一種であると云ふ說を立てられたが、說の當否は別として、觀經全帙をあれまで立派な變相に造り上げられたは、善導大師を置いては、到底其の人を求め得られぬことゝ思ふ。

善導作の淨土變に就ては、尙ほ一言添へて置くべきことがある。大順の『善導曼荼羅略讚』に依ると、俊乘房重源入宋の時、法然上人の囑に依て、五祖畫と共に善導筆の淨土變を請來して來たりしこと。東大寺落慶の日、之を大殿に安置したこと。爾後東大寺念佛堂に珍藏せしを、天正年中堂主錫田、阿彌陀寺を建立して此の變相を賣來して寺寶としたこと。其の他明和年中に及で、大順自身、該曼荼羅の副本を見、略讚を著はすに至つた次第を述べて居る。然るに重源が入宋の當時五祖像を賣しかへられたことは、『法然上人行狀畫圖』第六にも記されてあるが、變相の事には言ひ及んで居ない。同書第四十五、『本朝高僧傳』第六十五の重源の傳などにも、何等の消息を見ぬゆゑ、隨つて未だ今の處確實な史實として認むることは出來ぬ。

二、天壽國繡帳　中宮寺の天壽國繡帳が、淨土曼荼羅變相であるか否かと云ふことは、多少疑ふべき點もあり、方々識者間に異論のあるものだが、普通には阿彌陀淨土變であるといふ人が多い樣であるから、こゝにも第一に之を列ねたのである。然し繡帳の說明に就ては、『宗教界』第一卷第一號に、小杉博士の解說もあり、其の他先輩諸氏の著書論文等に於て、通途の說明は竭されて居るゆゑ、こゝには單に此の變相に對する卑見の一端を述ぶるに止めて置く。去り乍ら予とて別に新奇な考を持つて居る譯ではない。唯彼の繡帳の銘文に出て居る、天壽國の語は、『法王帝說』の記者も「天壽國者猶云天耳」と註して居る樣に、至て莫然たるもので、讀者の解し樣一つで忉利天、兜率天、藥師、彌陀、乃至は補陀落の淨刹等、其の孰れにも通ずる語であつて、說明の加へ樣で、何とでも云へるのである。

聖譽の『太子傳抄』の說では、此の變相を西方極樂として居るが、古い時代には、何とも定めて居たものではないことは、帝說の記事に見るも明かである。果して然らば、此の繡帳は何物であらうか。予は先づ假りに之を阿彌陀淨土變として、解釋を試みんとするも、奈何にせん、今傳ふる所は、丈餘の大幅の內が、僅に竪三尺橫二尺許、それも圖の那處と云ふ定めなく殘篇を摘み集められたものであり、原圖の全面は、とても窺い知るべきでない。卽ち何圖であるといふ判定をすることは頗る困難である。之を捉へて彌陀極樂界の勝相とするに就ては、少くも何處ぞに、天衣を著けた菩薩や、

寶樹寶樓閣といふた樣な光景があつて欲しい。それがない許りか、鬼形などの存在は、反て淨土變に非ざるべしといふ方の證據を爲さしむるもので、此の圖を以て、西方の變相とするは、如何にも苦痛千萬な說である。其の意味にて彌勒說法の兜率內院、又は藥師佛、阿閦佛の淨刹とするも同じ非難は免れぬ。若し强て與へて論ずるならば、外緣許りが殘つたものとし、彼の法如の淨土變に於ける外緣には、經所說の緣起を始め、日想觀已下十三觀、竝に九品往生の有樣まで畫かれてある。且つ繡帳の外緣に、銘文を錄することは他にも例のあることゆゑ、今繡帳の龜甲文字なども、畫の全體に散つて居たのではなく、外側の方か何かに布列されて居た。則ち今繡帳の殘篇は、其の外緣の一部かも知れない。而して其の外緣には色々な雜緣が繡出されて居たのだろうと考へて見たいが、是れでも猶ほ無理がある樣である。

次に阿彌陀淨土變でないとしたらどうか。『法王帝說』の記者は「天壽國とは猶ほ天と云ふごときのみ」と云ふた、此は仲々味のある語句である。若し此の變相が、法如の淨土變の樣に一目して淨土の光相と認め得るものならば、何も苦んで「猶云天耳」といふな文字を弄する必要はない。恐らく記者自身にも何の相だか解せなかつたものに相違ない。勿論、此の時代は餘り完全した淨土變といふ樣なものは畫かれなかつたのかも知れぬが、それにしても彌陀とか藥師とか彌勒とか、苟も佛土の光景を畫いたのであるならば、其の中尊がなくてならぬし、若し有つたとすれば、直ぐ何佛の淨土の相か解らぬ筈はないのである。建治新曼荼羅の裏書にも、何淨土變であるかを明にして居らぬ。思ふに此の繡帳には、最初から何佛と名指すべき本尊像がなく、卽ち雜然たる繪樣ではなかつたらうか。それに現存の圖上に、鬼形の存在することは、是れまた淨土の變相では無からうといふ反證になる一材料である。

斯樣な次第で、今の處、此の繡帳は銘文の上から云ふても、圖相から見ても、之が何を畫いたものであるかと云ふことを見定むるは困難である。最後に猶一つ予の考へとして附記して置きたいことは、此の圖が、或は有種の本生變ではなからうかといふことである。此の當時本生變の流行は、印度、西域を始め、仲々廣く行はれて居た。今圖の鬼形の現はれて居る所など、是れも彼の玉蟲厨子臺座繪の施身聞偈圖等と同類の物ではなからうか。（第二篇第一章參照）

三、法隆寺金堂壁畫の阿彌陀佛　法隆寺金堂の壁畫に、阿彌陀佛の像がある。古來之を四佛淨土の一に算へて居るが、特に淨土の二字を加へて、此の畫を阿彌陀淨土の圖とするは、如何なるものであらう。既に阿彌陀佛竝に脇侍二菩薩等の在す以上は、

淨土の相であると云ふて、云へぬことはないが、予は之を彌陀淨土變として取扱ふことは餘り好まぬものである。予の考へでは、彼の金堂の四佛の畫は、必らずしも淨土の有樣を畫いたものと云ふのではなく、後世塔婆の建立に際して四方佛を安置したと、同意義のもの(東寶記第二、七大寺巡禮記等參看)で、卽ち各淨土の變相を畫いたものであると云ふことゝは、少しく意味が違ふと思ふのである。而して此の畫が淨土變であるか否かの問題は、他日の論として兎も角も此の像は、本邦に現在する阿彌陀像として最も古い作物であることを記憶して置かねばならぬ。第七篇第五章第二節參照

四、智光の淨土變　孝德天皇の時代に、元興寺の僧智光が、淨土の變相を感得したと傳へられ、之を後に出來た當麻、淸海の二變と共に、本朝に於ける淨土三曼荼羅と稱して、古來珍重措かざりしものなることは、皆人の知る所である。

然るに或人の說に依ると、智光の此の事蹟を疑つて、後人假托の說だらうと云ふて居る。去り乍ら、智光の事蹟を記した史料が比較的新しく、變相其ものも當初の製作のものはなく、又特に曼荼羅なる稱呼を用ゆることは穩かでないにしても、唯是丈の理由で、智光の事蹟を否定すべき程の證據にもならない。予の考へでは、當時の佛敎文化の有樣から推察して、此の時代に、此の位の史實は有り得たことゝ思ふ。故に疑惑は疑惑として殘し置き、事實は事實として傳へて置く方がよいと思ふ。

智光の事、及び其の淨土の緣由を記述したものとしては、慶保胤の『日本往生極樂記』の說が一番古い。其の他『扶桑略記』第四孝德天皇白雉四年の條『水鏡』卷中孝德の條『今昔物語』第十五元興寺智光賴光往生語『往生十因』『十訓抄』第四『元亨釋書』第二『本朝高僧傳』第四『當麻曼荼羅疏』第四『智光曼荼羅合讚』『和州舊蹟幽考』第三等に、亦其の事蹟を揭げて居る。今『極樂記』の文に依ると、元興寺の智光賴光の兩僧は、少年の時より同室に修學す。賴光暮年に及で、人と語らず、失する所あるに似たり。智光、怪で之を問ふに、都て答ふる所なし。數年の後、賴光入滅す。智光自ら歎じて曰く、賴光は是れ多年の親友なり。頃年言語なく、行法なし、徒に以て逝去す、受生の處善惡知り難しと。二三月の間、至心に所念す。智光夢に賴光の所に到る。之を見るに淨土に似たり。問ふ是は何の處ぞや。答て曰く、是極樂なり、汝が懇志を以て我が生處を示す也、早く歸り去る可し、汝が所居に非ずと。智光の曰く、我れ淨土に生せんことを願ふ、何ぞ還る可けんや。賴光答て曰く、汝に行業なし、暫も留まる可からず。重ね問ふて曰く、汝前に行ずる所なし、何ぞ此土に生ずることを得んや。答て曰く、汝は我が往生の因緣を知らずや、我れ昔經論を披見して、極樂に生せんと欲す、靖にして之を思て、容

易ならざることを知る。是を以て人事を捨て、言語を絶して、四威儀の中、唯彌陀の相好、淨土の莊嚴を觀ず。多年に功を積で今纔に來れり。汝身意散亂、善根微少、未だ淨土の業因とするに足らずと。智光自から斯の言を聞て、悲泣して休まず。重て問て曰、何を爲して往生を得べき。賴光曰く、佛に問ひ上るべしと。卽ち智光を引て共に佛前に詣す。智光頭面禮拜して、佛に白して言さく、何の善を修することを得てか、此の淨土に生ぜん。佛智光に告げて曰く、佛の相好淨土の莊嚴を觀ずべし。智光曰く、此土の莊嚴微妙廣博にして、心眼も及ばず、凡夫の短慮、何ぞ之を觀ずることを得ん。佛卽ち右手を擧げ玉ひて、掌中に小淨土を現じたまふ。智光夢覺めて、畫工に命じて、夢に見る所の淨土の相を圖せしむ。一生之を觀じて終に往生を得たり」とある。此の智光の淨土變は、もと元興寺の極樂坊に安ぜられてあつたが、寶德三年十月に禪定院に於て燒失してしまつたとのことである。今大和西大寺、竝に極樂院にあるものは、共に原初のものではない。（楞更云、智光大德に『般若心經述義』の著あり。天平勝寶四年の作なり。今說と年代大に懸隔す、聊か疑を存する所なり）

第三章　當麻禪林寺所傳の淨土變相

一、奈良朝の阿彌陀淨土變

奈良朝に於ける淨土敎を代表する美術上の作物として、當麻禪林寺に傳ふる傳法如尼作の阿彌陀淨土變がある。是れ卽ち後世當麻曼荼羅と稱せらるゝ所のものであるが、茲に奈良朝時代の美術に顯はれた淨土敎の小景を述ぶるに就き、之を首題に置いたのは、他に當時の作物の面影を傳ふる製作のないのと、一は此の淨土變相は、既に普く世人の知悉する所のものである故である。法如が此の淨土變相を作つたと傳ふることは、我國淨土敎史上に於ける重要なる事蹟には相違ないが、一般佛敎文明史上から見た這種淨土變の製作は、左程特筆大書すべき事項でも無い。卽ち此等繡像、織成像の類は、遡つて支那、西域に於ても、可なり古くから行はれたもの、其の風が我國に傳つて、天壽國繡帳を始め、種々なる作物を出した。其の中には、藥師、彌勒、補陀落、靈山等の諸淨土變等も盛に製作せられたのであるが、今阿彌陀淨土變なども、其の一類に屬すべきものである。元興寺智光所作の淨土變のことは、前に既に一言したが、其の他奈良朝に入つて作られたものに、『阿彌陀悔過料資財帳』に記せる天平十三年三月新造のもの、『續日本紀』第二十三に載せる天平寶字四年七月、故皇太后光明子の第七々日の齋會の時、天下の諸國に令して、國ごとに作らしめられたもの、及び同書竝に『東大寺要　』第一、『扶桑略記拔萃』、『興福寺濫觴記』等に云へる同五年二月、惠美押勝が、同故光明皇后の追福の爲に興

福寺東院に安置せるもの、及び同六年七月九日の東大寺政所の牒に云へる同年七月九日、同所より石山院に送りしもの等あり。今禪林寺の淨土變なども、此等と共に算すべき一である。斯樣に奈良時代に於て作られた阿彌陀淨土變の數は尠なく無いが、今其の當時の作物の殘存して居るものは殆どない。唯此の禪林寺所傳のものが、幾回かの傳寫を經て、其の圖樣を今日に傳へて居る。卽ち奈良朝に行はれた阿彌陀淨土變が如何樣なるものであつたかと云ふことは、此の變以外に參考すべきものなきゆゑ、先づ此の變相に就き、一遍の說明を述ぶる次第である。

二、此の淨土變相の緣起に就きて　禪林寺所傳の最初の淨土變相が、元と奈良朝時代の作物であつたらうと云ふことは、同時代に於ける歷史的事實から推して、大抵差支へ無からうとも考へられるが、此の變相に附せる製作當時の緣起に就ては、大に疑ふべきものがある。『當麻曼荼羅緣起』、『古今著聞集』第二、『元亨釋書』第二十八等の記載は、比較的簡古の樣ではあるが、是れすら了解に苦しむ次第であつて、其の織付緣起の後人の僞作なるは勿論、酉譽の『當麻曼荼羅疏』第七、良定の『當曼白記』第一、其の他の諸書に出せる詳細を極めた小說的紀傳の如きは、一坐の寓話として、說敎材料等にするのなら格別、史實と云ふ邊からは、一顧半顧の價値もなきものである。義山の『當麻曼荼羅述贊記』第一には、通途の傳說に由て、一往其の緣起を說明した後に、已上は當麻寺の緣起に依て、略して記す。藤氏の系圖に依らば、豐成に五子あり云々、緣起と系圖と『續日本紀』と偶合して推せば、則ち法如降誕の年曆、事實去茫、齟齬甚だ多し、未だ何が是なるを知らずと云ふて居るが、要するに、中將法如に關する傳說は歷史上重視すべき、いづれの材料にも一致せぬので、其の攻證の結果は、動もすれば話題の主人公なる中將法如なるものをも抹殺せざるを得ざるに至らしむるのである。唯此の種淨土變製作のこと、及び緣起中に記せる『稱讚淨土經』書寫の事は、前にも一言せる如く、當時の事蹟として實際に行はれたことであるから、是は殊更に臆測を加へたり、事實を疑ふたりする必要はない。卽ち『續日本紀』第二十三廢帝天平寶字四年七月の條に、

癸丑。設皇太后七七齋於東大寺。幷京師諸小寺。其天下諸國。每國奉造阿彌陀淨土畫像。仍計國內見僧尼。寫稱讚淨土經。各於國分金光明寺。禮拜供養。

とある。阿彌陀淨土變を造ることゝ、『稱讚淨土經』を書寫することとは、或は互に相伴ふて居たかも知れぬが、此の史實と『當麻曼荼羅緣起』の所說とは、或は何等かの關係を有しては居らぬであらうか、或は特志の尼あつて、緣起所說の如き作業を行つ

たことがあるかも知れぬが、該縁起所説の如く、之を藤原豐成の女であると云ひ、且つ之に色々な傳説を附加したのは、全く後人の涅造したものだと思ふ。蓋し此の禪林寺所傳の淨土變は、西山證空上人が、同寺の僧見阿から此の變相の起由を聞て、遂に彼の寺に至て之を拜瞻し、仍て其の變相を寫して世に弘傳したのであるが、當時既に此の曼荼羅の製作に付き、天人が來て織つたのだといひ、或は生身の彌陀の織り作し玉ふ所であるともいはれて居た。(今世に傳ふる所説は悉く第二説に依る)孰れにしても、此の淨土變に附隨せる縁起の傳説は、史實として價値のあるものではないと思はれるのである。

三、唐善導作の淨土變との關係　予は前章に於て、此の禪林寺所傳の淨土變相、卽ち當麻曼荼羅の製作に就ては、善導所作の變相と關係があるであらうと想像を加へて置いた。然るに今此の章を執筆するに當て、此の淨土變相は、唯善導の『觀經疏』の文に依てのみ説明が出來、他の淨影や、天台の疏文では解釋は出來ぬと云ふことが解つた。從て若し『觀經疏』が善導の眞作である以上は、其と一致する淨土變相もまた善導作の淨土變と密接な關係を有すると云ふに就て、動ない所の説明が出來る。而して此の事に就きては、『法然上人行狀畫圖』第六にも、

かの當麻寺の曼荼羅は、彌陀如來化尼となりて、大炊天皇の御宇、天平寶字七年に、おりあらはし給へる靈像なり。序正三方の縁のさかひ、日觀三障の雲のありさま、人さらにわきまへがたかりしを、のちに文德天皇の御宇、天安二年に、もろこしよりわたれる、善導大師の御釋の觀經の疏の文を見てこそ、人不審をばひらき待りしか、天平寶字七年より天安二年にいたるまで九十六年なり。そのかみ吾朝にて、おられたる曼荼羅の、はるか後にわたれる觀經の疏の文に符合せるをば、不思議とぞ申傳て侍れ。

とあり。此の文の説明は、義山の同書翼賛に詳しく出て居るし、又直接に『觀經疏』其ものと對校しても、直に明了に分ることであるが、其の三方の縁の配り方が、善導の疏の分科と一致すること。卽ち曼荼羅の右邊は疏の序分、左邊の日想觀已下は疏の正宗分、下邊の九品は其の正宗分中、殊に分て如來自説の散善と釋せるものに一致するので、殊に左邊上端日想觀の所に、黑黃白の三雲を織り出せるは、根本聖典たる『觀無量壽經』にも、亦他の疏師の説にもない所のものであつて、唯善導の『觀經正宗分定善義』の

於此明上。卽自見業障輕重之相。一者黑障。猶如黑雲障日。二者黃障。又如黃雲障日。三

者白障。如似白雲障日。

の文のみ、能く此の畫意を說明することが出來る。猶ほ此の淨土變と、善導所作の淨土變との關係に就ては、一、當麻禪林寺所傳の淨土變は、善導作の淨土變を其まゝ傳へたるものなる歟、或は善導作の淨土變を模造せるものなる歟。二、善導の觀經疏は果して善導の眞作なりや、之を眞作とするに、我國に傳えられたるは何時なりや、變相の將來と、其の前後の消息如何等の問題の如きは、改めて猶ほ充分攻究を要する事項であらう。

第四章　平安朝の淨土敎美術と密敎

一、阿彌陀曼荼羅の請來　大唐の善導は、其の著『觀念法門』の中に「又若有人。依觀經等畫造淨土莊嚴變。日夜觀想寶地者。現生念念除滅八十億劫生死之罪。又依經畫變。觀想寶樹寶池。寶樓莊嚴者。現生除滅無量億阿僧祇劫生死之罪。」云々と述べられ、人に向て厚く變相の製作を勸進せらるゝと俱に、自から又三百餘鋪の淨土變相を畫かれた。此處で今更字義の說明も煩はしいが、兎に角變相、曼荼羅、俱に經軌に據て畫かれたものであるけれど、畫の內容は二者全く異なつて居ると丈は記臆して置かねばならぬ。卽ち古來變相といはるゝは、佛傳、本生、乃至は今淨土變の如き、孰れも皆經傳の說を其の儘山川草木禽獸乃至樓閣等に至るまで、細大漏さず示されてあるが、曼荼羅の方は、單に佛菩薩諸尊が次での如く列位されてあるのみで、其の以外には何も圖せられて居らぬ。又實際に其の成立の意義、內容から云ふても、大に性質を異にして居るのであるから、之を混同するのは宜しくない。智光や法如の淨土變までも、中世以後悉く曼荼羅と稱せらるゝに至つてしまつたが、此等極樂淨土圖の類は、矢張舊の原名に從て、淨土變相と稱する方が善き樣に思ふ。

平安朝に於ける最澄、空海等の新宗派の開立は、我國佛敎史上に一紀元を劃した許りでなく、其の請來に係る祕密儀軌竝に諸尊像等は、從來の佛敎美術の面目を一變せしめた。淨土敎美術も亦多くの影響を稟けたのであるが、其の中全く新しきものとして加へられたのは、所謂阿彌陀曼荼羅と稱せらるゝものである。之も一種でない、左に其の主なるものを擧げて見れば、

(一)五尊曼荼羅　之に亦二種ありて、其の一は、金剛界曼荼羅に依て、阿彌陀佛と其の四親近の菩薩とを合せて建立せられたもの、之を『覺禪鈔』には五尊曼荼羅事と題し、其の下に「師云。依金剛界。大師御筆云々)或抄云(薗)阿彌陀是妙觀察智所變。法利因語。

妙觀察智四種功德也。依境發智。智能轉法輪。若轉法輪時。必所言說。法菩薩所照境。利菩薩能照智。因菩薩能轉德。語菩薩能說語也。(師云。語菩薩維摩詰菩薩也。以無言有說法德云々)叡山東塔常行堂五佛如圖。(西塔横川同之)中尊等身阿彌陀(頂有寶冠)四菩薩法利因語也(相應和尚建立也文)」と記してある。叡山常行堂五佛のことは『山門堂舍記』等にも「安置金色阿彌陀佛坐像一體。同四攝菩薩像各一體」とあるが、但し『拾芥抄』下本諸佛部、阿彌陀五佛の條には「觀音。得大。彌勒。文殊(延曆寺常行堂如此)或觀音。勢至。地藏。龍樹。(是普通說也)」と云ふて居る。其の二は、四親近の菩薩に代ふるに、觀音、勢至、地藏、龍樹の四尊を以てせられしもの。『圖像抄』には「觀音。勢至。加地藏。龍樹。曰彌陀五佛。出何文乎。答。未見本經。但大唐並州一國國人。皆念彌陀。其國人命終時。阿彌陀觀音勢至地藏龍樹。皆來引接云々。見唐傳記」といひ、『覺禪鈔』には、同じく五尊曼荼羅の題下に「心覺說。右印相等。可見別圖」と註し、圖像をも載せて居る。

○(二)五十二身像　『圖像抄』、『覺禪鈔』共に阿彌陀曼荼羅の一種に數へ、特に『覺禪鈔』には圖まで揭げてあるが、其に就きて、『法苑珠林』等の說との間に、少々異錯あることは、前にも述べた通りである。

○(三)儀軌所說の曼荼羅　又八大菩薩曼荼羅とも呼ばれ、之に二樣ある。一は不空譯の『八大菩薩曼荼羅經』の說に依りて畫きしもの(圖像抄に其の圖を揭ぐ)、卽ち中央に阿彌陀、周匝せる八葉に觀自在、慈氏、虛空藏、普賢、金剛手、文殊、除蓋障、地藏の八大菩薩が安せられてある。二は善無畏譯の『八大菩薩曼荼羅經』に本づきて畫きしもの、是は八菩薩の中、金剛手の所に金剛藏菩薩が安せられた迄の相違である。又西方の協士と云ふ樣な意から、金剛手を除きて勢至菩薩を入れたことがあると見え、兩鈔共に其の事を記して居るが、其の本經は詳かでない。

(四)九品曼荼羅　又唐本曼荼羅、阿彌陀九品曼荼羅などゝも稱せらる。惠運僧都の請來せられたものである。

○(五)無量壽軌所說の曼荼羅　此の曼荼羅のことは、『圖像抄』には記して居らぬ。此は『無量壽經念誦儀軌』等の說に本づきて、蓮華の臺上に觀自在菩薩、其の八葉の上に八佛を安じたものである。此の曼荼羅では、形像の上では觀音が本尊になつて居る。之に就きて『覺禪鈔』には「智證大師疑問云。台中想金剛法。葉上八佛。其八佛何云云。長宴抄十四云。無量壽軌意。先入觀自在三摩地。而後成彌陀。如後心金剛薩埵成大日。八葉如來。謂彌陀。臺上觀自在。彌陀第六識變。卽肉團八葉心所心。是故約彌陀論之耳云云。私

問。上說。爲彌陀曼荼羅。觀音曼荼羅歟。答。彌陀觀音一佛也。大樂軌文可見。故彌陀軌說彌陀曼荼羅也。大樂軌意。觀音曼荼羅。但可聞師說。師云。此二尊殊理智不二德顯也。合行法也。理以智佛爲眷屬。顯智時。爲理眷屬。云云。口云。彌陀因位悲願殊勝文」とある。覺鑁の『五輪九字明祕釋』に載せてある九字曼荼羅と稱せらるゝもの、亦此の曼荼羅であるが、此の圖には、中央に彌陀、八葉に八佛を安じ、更に次の八葉に、八大菩薩が次の如く安せられてあるのである。

二、惠運請來の曼荼羅に就きて　入唐八家の一なる安祥寺惠運僧都の事蹟は、『入唐五家傳』を始として『僧綱補任抄出』卷上、『明匠略傳』卷下、『東寺長者補任』第一、『東大寺要錄第』二、『諸門跡譜』、『一代要記』第二、『元亨釋書』第十六、『本朝高僧傳』第七、『諸宗章疏錄』等にも記されてあるが、其の九品曼荼羅を傳へたといふ事實に就きては、惠什の『圖像抄』に

惠運僧都請來九品曼荼羅。中台有八葉開敷蓮華。華臺上有上品上生阿彌陀佛。周匝八葉。安八品阿彌陀。內院四隅法利因語。第二院十二光佛。四攝外四供。第三院二十四菩薩。一方有六菩薩。合二十四尊也。但加內院法菩薩。爲二十五菩薩也。

とあるのが始めての樣にも思はるゝが、然し惠運が此の曼荼羅を請來したと云ふこと上記の諸傳記には其の記載を缺いて居る而已ならず、『進官請來目錄』の中にも其の目を缺いて居る。之に依て『覺禪鈔』には、多少の疑を挿て『二十五菩薩者。觀世音菩薩。大勢至菩薩。藥王菩薩。藥上菩薩。普賢菩薩。法自在菩薩。師子吼菩薩。陀羅尼菩薩。虛空藏菩薩。德藏菩薩。寶藏菩薩。金藏菩薩。金剛藏菩薩。光明王菩薩。山海會惠菩薩。莊嚴王菩薩。珠寶王菩薩。月光王菩薩。日照王菩薩。三昧王菩薩。定自在王菩薩。白象王菩薩。大威德王菩薩。無邊身菩薩。覺印闍梨記云自證房惠雲者誰人哉。若安祥寺先德惠運也。又件請來未見之。若從大唐來惠雲歟。僧綱補任云。廷曆十七年任律師。不補僧都云何。已上心覺說也。覺禪云。所持安祥寺錄內題慥惠雲字也。自證房義不指南。但僧綱補任可見。又大唐惠雲可尋」と云ふて居るが、予は寧ろ自證房、竝に惠什等の說のまゝに、安祥寺惠運の請來と云ふことにして置きたい。覺禪の云ふ請來目錄に其の名を見ぬと云ふことは、相當に理由のある論據であるが、但し今世に傳へて居る請來錄と、覺禪の所持して居た請來錄とが、其の內容を同じくして居たと云ふことならば、予は反て請來錄其の物に就て疑惑がある。卽ち『入唐五家傳』中の惠運傳に依ると、「其取來儀軌經論佛菩薩祖師像曼荼羅道具等（具如目錄）」とあるが、現存の目錄には儀軌、經論等は列名され乍ら、佛菩薩祖師像曼荼羅道具と云ふ樣なものは全く無い。且つ之を他

家の請來錄に比較して見て、如何見ても完璧な『進官請來目錄』と認むることは困難である。若し今一歩讓りて、今請來錄が其の當時の目錄であるとしても、惠運歸朝の當時私に此の樣な圖像を將來したと云ふこと無しとも限られぬ故、他に『惠什抄』の說を打消す丈の史料の出るまでは、從來の傳說に從て置いて善きことゝ思ふ。

惠運が唐から還つて來たのは、仁明帝の承和十四年(唐、宣宗大中元年、皇紀一五〇七)であるが、彼の九品曼荼羅が、此の時の請來であるすると、是は我朝淨土敎史上、餘程重用な位置を爲したものであるかも知れぬ。源信等の諸大德が出世されて、盛に淨土敎を鼓吹し、同時に二十五菩薩迎接、九品往生等、諸種の圖像が行はるゝに至りしは、此は强て其の本基を惠運の此の種曼荼羅の將來に歸せしむる譯には行かざるも、今の九品曼荼羅が、九品彌陀と、十二光佛と、二十五菩薩とを合せて、一の曼荼羅を建立して居ることは、餘程な興趣を有するものと云はざるを得ぬ。源信僧都の如きは、充分に諸家の章疏を讀み、特に淨土敎に對しては、充分に力を盡され、『往生要集』の如き名著もある人、此等の先德が、來迎圖等を畫くに、何も惠運請來圖などに眼を假さずとも宜い樣なもの、それに既に古く淨土變相も流布されて居たのであるから、源信等の創意に出たものとしても、左程無理な解釋でもないが、予は平安朝以後の淨土敎美術が、其の本尊像等に於て、祕密儀軌の影響を蒙りたること多きを顧み、九體佛、二十五菩薩等の崇信は、其の影響の幾分を、或は此の惠運僧都請來の九品曼荼羅等から稟けて居りはせぬかと考ふるのである。

三、軌前の阿彌陀如來像　祕密儀軌竝に圖像の請來に伴ふて稟けた淨土敎美術の影響として、差當り尤も顯著な表彰を示して居るのは、本尊阿彌陀如來の尊容である。平安朝以前には、定印に住し給ふた彌陀尊像の如きは、全く世に流布せられなかつたが、其が平安朝に入つて、鳳凰堂や、法界寺の阿彌陀佛像の樣な、兩界曼荼羅にある同如來と同じ坐相、印相の尊容が行はるゝに至つた。九體佛と云ふ樣なものも、又後背に十二光佛を安ずることなども、亦恐らく祕密敎の影響を稟けたのであらう。當麻曼荼羅、卽ち法如の淨土變相の中尊、阿彌陀如來の印相に就きては、疏家の間に色々の說があるが、此は必ずしも儀軌所說の印相に配當して說明せねばならぬといふ程の必要はない。予の考では、少々獨斷に過ぐるかも知れぬが、是は要するに胎藏界曼荼羅釋迦院の釋迦牟尼佛、アジャンター第十七號及び第十九號窟殿の釋迦牟尼佛等と同じ說法相の印相に准ずべきもので、是れ極樂世界に於て、敎主阿彌陀が、大衆の爲に說法し給ふ所の相を現はしたものである。橘夫人念持阿彌陀佛、善光寺

如來、智光の淨土變の本尊の如きは、且らく別論とし、法隆寺金堂壁畫四方淨土繪中の阿彌陀、幷に金銅押出佛の同如來像の如き、今法如の淨土變と些少の差異はあるが、是れも要するに、同一說法相として解釋して過誤なきことゝ思ふ。而して印相の方は兎に角、其の坐相に至ては、軌前の諸尊像は、孰れも密敎所傳の諸尊と全く反對に結跏したまふて居るのである。

猶ほ序に一言して置くが、法如の淨土變の阿彌陀佛像等が、密敎所傳の曼荼羅の尊容に一致せぬからとて、之が必ずしも經軌の說に依らぬと云ふのでなく、亦彌陀佛は何時も定印に住し給ふといふ譯でも無き故、他の印相を成し給ふ尊容のあるは當然である。且つ彌陀佛が說法相を作し給ふことを記した經軌は澤山にあるので、即ち『不空羂索神變眞言經』、『金剛恐怖集會方廣儀軌觀自在最勝心明王經』、『陀羅尼集經』第二、『阿唎多羅阿嚕力經』等、皆其の一者である。又俠持の二菩薩の如きも、『阿嚕力經』、『陀羅尼集經』等は、右を觀音、左を勢至となし。『不空羂索神變眞言經』第六、及び『最勝心明王經』等は、觀經と同じく、左を觀音、右を勢至として居る。本來儀軌と云ふもの、亦一經一軌互に其の說を異にして居るのであつて、何の軌が必ず軌範であるとする譯には行かぬ。軌前式の像だと早合點して、彼も此も經軌に契はぬものだと速斷する如きは少し考へ物である。

第五章　淨土思想の蔚興と其の影響

一、唐宋代の淨土敎との關係　淨土宗の開祖は法然上人であることは申すまでもないが、然し上人は淨土敎の大成者であつて創唱者ではない。上人以前に既に光勝、源信、良忍等の諸先德に依て、一般信仰上に於ける淨土思想は充分に流布されて居た。其の藤原時代に於ける淨土思想の鬱興は、啻に予等の豫想以上の殷盛を致したばかりでなく、若し美術史上より云ふならば、源信僧都等の如き名匠あつて、盛に阿彌陀佛竝に來迎圖等を畫き、猶ほ九體阿彌陀の像を作り、九品往生の相を畫くことなど盛に行はれて、謂ゆる我が日本淨土敎美術史上に於ける黃金時代をなした。卽ち法然上人の出世以前に於て、我が淨土敎は、既に充分に信仰上の美華を開いたので、あつた。然るに此と略同じ時代に、支那に於ても、亦幾分我朝と相似た樣な事實が行はれたのであるが、こゝに藤原時代の作者作物等を說述するに先ちて、其の對照參考の爲め、唐善導以後、此の時代前後に於ける彼の地の敎勢の一端(其の作物に關する部分)を記述して置く。

唐の善導大師が、淨土變相を畫かれ、而して其の變相が、我が法如の作と傳ふる淨土變相と、何等かの關係を有するものであらうと云ふことは、前々章に卑見の一端を記述したが、彼地に於ける淨土變相等の製作は、引き續き世に行はれたのであつた。柳宗元の『龍興寺修淨土院記』に「廉隅毀頓圖像崩墜」と云ひ「有信士圖爲佛像」とあり。又韓愈の『弔武侍御畫佛文』に「就浮屠師請圖前所謂佛者。浮屠師受而圖之」と云へるもの、孰れも前後の文より推して、阿彌陀佛に關する圖であつた事は確でも、其の圖像が何樣なものであつたかは知ることは出來ぬ。

李白の『金銀泥畫淨土變相讃』には、馮翊郡秦夫人、亡夫湖州刺史韋公の爲に、金銀泥にて西方淨土變相を畫けることを記し、其の文中に「精求名工。圖金創端。繪銀設像。八法功德波。動靑蓮之池。七寶香華光。映黃金之地。淸風所拂。如生五音。百千妙樂。咸疑動作」とあり。又白居易の『繡西方淨土幢讃』にも「有女弟子弘農郡君。姓楊氏。號蓮華性。發弘願。捨淨財。繡西方阿彌陀佛像及本國土眷屬一部。奉爲故李氏長姉楊夫人。滅宿殃。迫冥祐也。夫範金設繪。不若刺繡紋之精勤也。想形念號。不若睹相好之親近也」とある。是れ等は其の圖相が如何あつたか解らぬが、併し孰れも淨土變相なりしことは確である。

猶又同白居易の『畫西方淨土幢記』には、

白居易。當衰莫之歲。中風痺之疾。乃捨俸錢三萬。命工人杜宗敬。按阿彌陀無量壽二經。畫西方世界一部。高九尺。廣丈有三尺。彌陀尊佛坐中央。觀音勢至二大士侍左右。人天瞻仰。眷屬圍繞。樓臺妓樂。水樹花鳥。七寶嚴飾。五彩張施。爛爛煌煌。功德成就。

とあるが、此の白居易の淨土繪は、阿彌陀、無量壽の二經に依て畫くとあつて見ると、善導の『觀無量壽經』に依て圖せられたものとは、餘程圖相も變つて居たかも知れぬ。尙ほ同白居易の『繡阿彌陀佛讃』には、女弟子京兆杜氏が、妣范陽縣太君盧夫人八月十一日忌辰の爲め、西方無量壽佛一軀を繡したといふことが記されてある。柳宗元は唐憲宗の元和十四年(嵯峨天皇弘仁十年、皇紀一四七九)、白居易は同宣宗の大中元年(仁明天皇承和十四年、皇紀一五〇七)に卒した人であるが、要するに上記の諸事實は、主として晩唐(我平安王朝代)に行はれたものである。思ふに此等の變相の或物の中には、彼の淸海曼荼羅などの藍本となつたものがあるかも知れなぬ。

次に孤山智圓の『西方淨土讃』には「吾慈母馬氏。生厭穢境。死忻淨刹。壽七十有一而終。寢疾之際。以所造淨土無量壽像。囑我以供養。承事焉十載干茲矣」といひ、楊傑の『淨慈七寶彌陀像記』には、杭州南山淨慈道場の比丘法眞大師守一が、同志を結で金銀眞珠珊瑚琥珀硨磲碼碯を以て阿彌陀佛像を造り、像成るの日、八種の香湯を以て如來を灌

沐せることを記し、同楊傑が宋哲宗の元祐元年(白河天皇應德三年、皇紀一七四六)に選せる『建彌陀寶閣記』には「乃造寶閣立彌陀大像。環以九品菩薩。海藏經典在其後。清淨蓮池在其前。定觀奥室。分列左右。誓延行人。資給長懺。以結淨土之緣」と云ふた樣な文句がある。又元照の『無量壽院造阿彌像記』には、元祐八年(堀河天皇寛治七年、皇紀一七五三)臨安縣實杭邑なる無量院の境内に彌陀殿を建て、八尺の彌陀像を雕造せることを記し、『開元寺三聖立像記』には「於是糾募衆信。躬往錢唐。命工雕造三聖立像」と云ひ、且つ『觀經九品圖後序』には、

姑蘇逸上人。久歴叢林。不滯偏見。屬意觀經。蓋有年矣。將恐道俗未閲經本。乃命工圖繪九品之相。具引經文。以示其說。隨於經後。各以偈頌。爲之激勵。

と云ひて、姑蘇の逸上人なる者が、九品の相を圖繪せしめたことが記してある。又蘇東坡の『畫阿彌陀佛像偈竝序』には、東坡は元照の勸に依て、亡母蜀郡大君程氏の簪珥遺物を捨して、匠胡錫に命じて、阿彌陀佛像を畫かしめたることを述べ、『畫阿彌陀佛像讃』には、元祐八年八月一日、其の妻の京師に卒せし時、遺言に依て愛用する所のものを捨し、其の子をして阿彌陀の像を畫かしめ、翌紹聖元年(堀河天皇嘉保九年、皇紀一七五四)、像成り金陵清涼寺に安せることを記し、宋徽宗の大觀元年(堀河天皇嘉祥二年、皇紀一七六七)に選せる陳瓘の『延慶寺淨土院記』には「今延慶西隅。尚有隙地。若得錢二千餘萬。構屋六十餘間。中建寶閣。立丈六彌陀之身。夾以觀音勢至。環爲十有六室。室各兩間。外列三聖之像。內爲禪觀之所。殿臨池水。水生蓮華。不離塵染之中。割開世外之境」云々と云ひ、介然、惠觀、仲章、宗悅等相謀りて、哲宗元符二年(堀河天皇康和元年、皇紀一七五九)件の堂を落成せることを記し、なほ孝宗乾道五年(高倉天皇の嘉應元年、皇紀一八二九)清哲の記せる『延慶寺重修淨土院記』には、紹興年中清潤法師なる者、此の堂を重修せしことを記してある。(佛教大辭典、延慶寺の條及び同附圖第八十一參照)其の他法忠の『南嶽山彌陀塔記』には、三丈二尺の石窣堵波一基を南嶽羅漢洞妙高臺の右に建て、念佛人名を其の中に藏したることなどをも記して居る。又惠洪の『李伯時畫彌陀讃』には政和八年(鳥羽天皇元永元年、皇紀一七七八)貢先之携ふる所の李伯時の阿彌陀畫像に讃せることを述べてある。

以上は、單に『樂邦文類』に擧ぐる所のものに依て、其の主要なる事項を抄出したものであつて、之を以て此の時代に於ける彼の地の淨土教美術の一般を窺知せしむるには足らぬかも知れぬが、兎も角も變相や九品往生相などの流行されたことは、其の一端を揣摩することが出來る。但し楊傑、元照、蘇軾、陳瓘等、孰れも源信僧都等より

は以後の人であつて、今擧げた丈の材料では、時代から云ふても、作物其ものゝ内容から見ても、本邦に行はれたものゝ方が、先進の樣であるかの樣にも考へらるゝ。但し之は未だ容易には速斷は出來ない。彼の惟白、法忠等の諸師に依て流布された華嚴變相が、我國に於ける華嚴五十五所繪卷等の行はるゝ源泉をなして居る樣に、源信僧都のものゝ如きも、何等かの手本が彼地から渡つて居なかつたとも限られぬが、予不聞にして未だ明徵を得ない。然し源信僧都が宋に『往生要集』を送つた、其に對する周文德の返報中に、

結緣男女弟子伍佰餘人。各發虔心。投捨淨財。施入於國清寺。忽餝造五十間廊屋。彩畫莊嚴內外。供養禮拜。瞻仰慶讃。

とある。其の柱壁の彩畫といふた樣なものは、或は九品往生相の樣なものではなかつたらうかと察せられぬでもないが、此の邊の消息は、他日閑を得たら、一通りは其の史實を明にしたいと思ふ。

二、藤原時代淨土思想興起の源泉　藤原時代に至て、蔚然として往生淨土の思想が勃興したに就ては、直接間接に種々の原因もあらう。細かい事は、一般淨土敎史の方面に讓るとして、若しこゝに要略して云ふならば、先づ台嶺と野山とより流出されたのが、其の主なるものであらうと思ふ。而して台嶺卽ち叡山から起つた念佛思想と、野山卽ち高野山から弘められた往生思想とは、其の間に少し面目を相異にして居る所がある。それは、台嶺の淨土思想は、法華四種三昧の隨一なる常行三昧が根基となつて居るが、野山の淨土思想は、主に眞言祕敎其の物の上から、其の立脚地を求めて居る。其の兩思想系統が、共に時代の下るに從て、多少づゝ漸次に其に脚色が加はつて、一口に言へば雜修的傾向のものとなるに至つたのである。然るに此の外に法華四種三昧の一たる常行三昧でもなく、又眞言祕密敎等と秋毫も關係なき、純粹の淨土敎として、觀經を中心として發達した一系統がある。是は申すまでもない善導大師等の首唱された念佛の法門で、最初は比較的世に顯はれなかつたが、其が源信僧都等に依て、『往生要集』等の中に祖述さるゝに至り、順次に一般信仰中に堅く流布さるに至つた。要言すれば、藤原時代の淨土思想は、此等の三思想が蔚然雜然として流布せられ、其に伴ふて美術上の種々の新作物をも見たのである。

第六章　清海作の變相と智光法如の二變

一、超昇寺清海の淨土變相の製作　藤原時代に於て、淨土往生の思想が、蔚然として

勃興し、且つ其の如何に盛に弘通せられたかと云ふことは、『日本往生極樂記』、『拾遺往生傳』、『後拾遺往生傳』、『續本朝往生傳』、『三外往生記』、『本朝新修往生傳』、『高野山往生傳』等の書を一讀したものゝ夙に知る所であつて、假令淨土宗其ものは、未だ開立せられなかつたにしても、實際の彌陀に對する信仰の流傳は、決して、法然上人出世以後の事實に讓らなかつた。

法然上人の淨土敎は、念佛行者の行業を口稱の一行に止めてしまつたが、其の以前の淨土敎は、天台、眞言等の他家の寓宗であるだけに、平生の所行も雜修的で、人に依り、時に從て、色々な善根が修せられた。極樂の變相、來迎圖、九體佛等の造立を始めとして、迎講、小豆念佛などの行儀の流行も、實に此の時代の淨土敎の事蹟の著しきものゝ一であつたが、特に源信僧都等の名手を本として起つた淨土敎美術は、其の後も盛に行はれたので、從てこゝで予等が攻究すべき事項は、甚だ尠なくはないのである。而して此の章で述べやうとする超昇寺(或は超證寺、超勝寺に作る)清海上人の事は、時代から云へば、源信僧都と同じ一條天皇の寛仁元年(皇紀一六七七)に示寂した、人物としては無論源信僧都と對比すべき人でなき故に、本來ならば源信僧都の事蹟などの方を先に辯ずべきであるが、唯上人の曼荼羅製作の事蹟は、源信僧都作の諸美術などゝ違ひ、後代の作物との關係薄く、且つ其の所作の變相は、古來本朝淨土三曼荼羅の一として、智光、法如の二變と併せ稱せられて居るものであるから、說明の便宜上、先づ上人の事、併せて他の二變の事に就いて述ぶるのである。

清海上人は、當時餘り傑出した知識ではなかつたらしひ、其の事蹟も餘り詳かでない。『拾遺往生傳』卷上に依ると、上人は常陸の國の人で、幼にして出家し、初は興福寺に居たが、後に超昇寺に住した。永延の末に、始めて此の處に於て法華三昧を修し、正曆の初に、自他を勸進して、七日の念佛を修した。其が謂ゆる超昇寺の大念佛の濫觴であるそして寛仁元年十月七日に寂したとあるのみで、變相製作の事などは、記してない。之に就きて『當麻曼荼羅疏』第五には、應永三十四年(皇紀二〇八七)十月十五日、酉譽上人、親しく此の超昇寺に詣して、其の寺僧に就て、其の曼荼羅の新圖を見たことを記し、なほ一通り同曼荼羅の緣起を述べてあるが、其の清水寺の觀音化現して此の曼荼羅を書き給へりとの傳說の如きは、餘り信を置くに足らない。然し曼荼羅其ものゝ銘文に、

沙門清海爲奉圖繪　極樂淨土并兩界曼　茶羅倡善尼女等令
績織藕絲功畢納匣　蓮華座現感懷叵忘　寫取彼樣令畫外陳

拜者知之于時長德　二年丙申十月廿二日

とあるは、彼の當麻曼荼羅の織付緣起の說などと違つて、今の三善爲康の『拾遺往生傳』の記事中に云へる、超昇寺大念佛の創始のことゝ相待て、充分其の事實たることを認めしむるに足る樣である。

既に超昇寺其の物が、眞言宗で眞如法親王開基の寺で、金剛界五佛を本尊とし安置してあつた。銘文に此の淨土變と共に兩界曼荼羅をも圖繪し奉つたとあるが、此は同じ『拾遺往生傳』の中の仁慶の傳に「殊發道心、賣資物、圖繪兩界曼荼羅、彫刻阿彌陀佛像、兼爲四恩法界、書寫一乘妙典」とあると略同樣の事蹟であつて、此の種の行業は、當時屢行はれたものであらう。且つ銘文に記せる長德二年(一六五六)は、淸海が既に尼女を勸倡して績織し、功畢りて既に一段匣中に納められたものを、後に取り出でて、更に外陳に感得の座蓮を圖せしめた時に記したものであるが、其の座蓮に記せる文其ものも、亦暗々裏に此の時代の作物であらうと推測せしむる傍證をなさしめぬでもない。孰れにしても、此の淸海上人が、超昇寺に於て大念佛を創めたこと(超昇寺の大念佛は、酉譽上人此の寺に參詣せられし時まで行はれたりと見え、其の疏中に毎年八月六日より一七日の間、七大寺十五大寺の大方遠近の諸人集りて不斷念佛今に不退に勤けりと記せり)、其と共に善尼女等を督して、兩界曼荼羅、竝に今の淨土變相を織造したことは、必ず確な事實であつたらうと思ふ。

二、平安朝以後の淨土變相　奈良時代に一時盛に行はれた阿彌陀淨土變が、平安朝以後に於ても、引き續きて行はれたか如何かといふことは、猶ほ多少史實の穿鑿を要することであるが、或程度までは流布されて居たものらしく、且つ支那から請來されたものもあつたらしい。延喜二年三善淸行の撰せる『智證大師傳』に

九年。唐溫州內道場供奉德圓座主。付婺州人詹景全向國之便。贈則天皇后縫繡四百幅之內極樂淨土變一鋪(長二丈四尺、廣一丈五尺)織繪靈山淨土變一鋪(長一丈五尺、廣一丈)付法藏上自釋迦迦葉下至唐慧能之影像二幀子(廣各四丈)

とある。九年とは淸和帝の貞觀九年(唐懿宗咸通八年、皇紀一五二七)で、其の贈られた淨土變相は、唐則天武后の繡四百幅の一であると云ふのである。此は單に一證に過ぎぬが、此の他なほ支那から請來された變相も一ならず二ならずあつたらうと豫想されぬでもない。又我朝で作られたものとしては、『山門堂舍記』西常行堂の條に、「寬平六年八月日。持念堂和尙獻憲之時。始行不斷念佛。延長五年(皇紀一五八七)二月。靜觀僧正。於四面柱。令繪極樂淨土」といへるを始め、淸海の變相製作に次ぎては、『本朝

世紀』長保四年(一六六二)十二月の條には、慈德寺に於て、阿彌陀曼荼羅一鋪、及び金泥の『法華經』一部を慶せることを記し、『榮花物語』第十九着裝(治安三年、一六八三)の條に「第四十九日をこなはせ給、この月のつこもりよりはじめさせ給、佛は極樂淨土のまんだら、日に法華經一部、阿彌陀經四十九卷をも供養せさせ給」といひ、同書第三十つるのはやし(萬壽四年、一六八七)の條に「しはすの二十八日、女院極樂淨土かゝせ給て、色紙の御經などして、申上させ給ふ」といひ、又

御法事は正月にせさせ給べければ、よるをひるによろづいそがせ給。御ほとけは、極樂淨土をぬひ佛にせさせ給。御繪は金泥、正月二十八日なれば、いとながくなりぬ、といそぎたち給。

とある如き、其の他『小右記』(考古畫譜所載に依る)長德五年(皇紀一六五九)七月三日の條には、

拂曉向禪林寺。故女御周忌法事日也。(中略)早朝先送法服七領。(僧綱紫甲、凡僧褐甲)奉圖繪阿彌陀淨土。奉書銀字法華經。其經□紺紙水精軸。納紫檀筥。(以蘇木潤色)

同書寛仁二年(一六七八)四月十五日の條にも「今曉宰相在中辨等參登。佛(阿彌陀淨土、左、中辨令圖繪)經(法華經宰相令講)」といひ、『本朝文粹』に載せらるゝ『華山院四十九日御願文』には「奉圖繪極樂淨土尊一摹。奉書寫金字妙蓮華經一部。開結。阿彌陀經。般若心經。各一卷」と云ひ、『續本朝文粹』所載の『實成卿家督追善願文』にも「仍奉圖繪極樂曼荼羅一鋪」とある。

當時清海の淨土變製作と前後して、亦以て此の種變相の行はれたことを證するに足るのであるが、然らば此の時代に行はれた淨土變相は、其の圖樣は如何なものであつたらうか、多くの數の中には、當麻寺のものと同じ樣なものも行はれたであらうが、今清海作の變相の如きは、全く之と別種のものであつて、之に依て同じ淨土變といふても、他の異圖の行はれつゝあつたことを證明するのである。

而して此等異圖淨土變の流布に就ては、圖樣其ものは清海上人等の自から發明する所であるか、或は他に藍本があつたかといふ。是れ一の大なる疑問であるが、予が卒直に考へた所では、清海上人等が、經に依つて、かゝる圖樣の變相を畫き出されたものであると考ふるよりは、支那より將來された、此に類する原圖のあつたのを模倣して造つたものであるとする方が穩當かと思ふ。勿論之は未だ確と研究した譯ではなし、證左を摘出し得たのでもなき故、畢竟一の想像說に過ぎぬに相違ないが、然し我佛教及び佛教美術の流傳は、大抵彼地よりの將來品に本づきて、常に其の流行の端緒を開いて居る。それには華嚴變相、淨土五祖畫の流行なども、其の一例であ

るが、何しろ當時入唐僧、並に彼我人士の往來に際しては、絶えず佛像佛畫の將來されたことは事實であるらしいから、恐らく此の種の變相をも傳へたものだらうと考へる。加之圖其ものゝ內容よりいへば、是れは善導等所作の觀經を中心として圖繪されたものと異なり、寧ろ前章に一言した白居易が阿彌陀、無量壽の二經に依つて作つたといふ淨土繪などに比准すべきものである。外緣の十六蓮座、及び蓮中に書せる偈文は、全然『觀無量壽經』と沒交渉ならざることを明かならしむると同時に、十六觀頌の製作は、當時支那先德の間に行はれたものであるから、之も或は彼地の風を模したものであるかも知れぬ。遵式の『十六觀經頌』、有嚴の『十六觀頌』、元照の十六觀頌』等は、今猶ほ『樂邦文類』等の中に收載されてある。時代は淸海の作より後で、はあるが、其の元照の頌など、孰れも一寸似て居る所などは妙である。試みに其の一偈を擧れば、

元　照　　淸　海　　遵　式

第一日觀　　第一日想觀　　日　觀

落日懸鼓　　黃昏向四方　　正座面西想日輪

出生死路　　觀日如懸鼓　　見日欲沒如懸鼓

十二時中　　想像極樂光　　見已閉目開目間

繫念一處　　皆令明了心堅住

或は少し臆測にわたり過ぐるかも知れぬが、彼の東大寺の『華嚴善財童子繪卷』に、楊傑の『大方廣佛華嚴經入法界品讚』の頌が錄せられてある例などから推して考へると、今の淸海變の偈文なども、淸海自身の作でないか知れぬ。要するに平安朝以後に於ても、此等の淨土變相は、支那からも流傳され、また我國に於ても屢作造された。而して淸海變の樣な新變相と共に、法如變、智光變なども、相竝で行はれたのである。

三、淸海作の變相と他の二變相　智光、法如、淸海作の三種の淨土變相は、其の圖相の內容より推察して、同じ阿彌陀の淨土變相であるとは云ふものゝ、三者共に全然別樣のものであるは、覽者の一目して知る所である。『淸海曼荼羅合讚』には、簡單に此の三變の同異を論じて、問ふ此の變相と餘の二變と、同とせんや異とせんや。答或は同或は異なり。同とは三變共に同じく安養土の相を指示す。故に舞場段寶池寶樹寶樓三尊の特迥、菩薩の圍繞、虛空莊嚴、其の餘の諸相、大率是れ同じ。若し其れ頭數の多少は、只是れ廣略の異のみ。或は異とは、前の二變は五色の畫彩、第三の圖は紺地金銀泥。又第一には外緣の相なし、第二には觀經の序正を段別して、外の三邊に圖畫し書寫

す。第三には十六蓮を外の四緣に畫し、華葉に文を書す。其の文は經の正宗の頌す。已上といふて居る。其の圖相上の細かい研究は別として、大體の異同は右の通りであるが、之を更に經證の上から攷察して觀ると、智光の變相は『觀無量壽經』や『無量壽經』には沒交渉の樣に見え、强て配すれば『阿彌陀經』に依るか、又は漫然汎ひ意味の考の下に、阿彌陀佛の淨土の相として畫いたものであらう。法如の變相は、『觀無量壽經』に依て作られた變相であるが、經といふよりは、寧ろ善導の『觀經疏』其ものゝ變相であると、曩に既に述べた如くである。次に今清海變相は、恐らく白居易作の變相等に准すべきもの、此上臆說を加ふれば『無量壽經』本位の變相と解すべきものかと思ふ。外陣の十六蓮臺中の十六觀頌の存在と、『觀無量壽經』を疎外して居らぬことを明白にして居るけれど、九品を開示せぬ所などは、善導などの疏の意とは、多少の間隔があるのである。此等の考は、固より予一個の當面の推測に過ぎぬが、兎も角も此等の異圖の淨土變相の製作さるゝに至つたに就ては、作者自身の據つた經說幷に意樂の相違もあり、又依て造作した藍本の相違もあらう。然し這般問題の眞相を想定するには、予等の有する參考資料は餘りに寡少であつて、今こゝで妄りに斷案を下すことを得ぬのである。序に一言して置くが、西山證空上人以下、近世の淨土曼荼羅研究家の說では、鎌倉時代以前には、當麻の淨土變相などは、世に傳寫されなかつた樣に書いてあるが、實はそうでない、卽ち『覺禪鈔』には、其の當麻の變相に就きて、

大和國當麻寺西堂。九品極樂曼荼羅。上品上生敎主。長三尺許。印相九品惣印云云。

印相可尋。宇治僧正(覺忠)件像被奉寫。以彼正本圖之。

と云ひ、又智光の變相に關しては、

元興寺。以極樂房正本圖之。後白河院御宇元興寺別當範玄(時僧都)自彼經藏進覽云云。件本板圖之。長一尺。廣一尺□寸也。普通本(或は善通寺に作る)中尊合掌也。正本不然。

と記してある。二變共に夙に世に傳寫されつゝありたることは事實である。

第七章　藤原時代淨土敎の代表者源信

一、源信僧都の出世と其の遺德　惠心院の先德權少僧都源信は、身は台嶺法華宗の行者なれども、其の一代の鴻業は、實に念佛の宗門の弘通であつた。光勝といひ、千觀と云ひ、其の他念佛の行者は、當時既に尠くは無かつたのであるが、其の敎化に於て、遺德に於て、孰れも僧都に比肩すべきものなく。且つ此の意味に於ける僧都は、啻に藤原時代の淨土敎鼓吹者の第一人である許りでない。念佛門の高德として、千古に

通じての導師である。特に僧都が化他方便の爲にものせられた迎接曼荼羅等の製作は、我が佛教美術上に多大の影響を與ふると共に、淨土教美術史上に於ては、殆ど一新紀元を劃して居る。平安王朝以後、新興の秘密教美術の爲に、當に廢頽萎微せんとしつゝあつた淨土教美術は、解行共に高く、而も技能に於ても絶世の靈腕を具せられた此の大名匠に依て復活し、又更に新なる法運を開拓せられたのであつた。

僧都の事蹟は、『續本朝往生傳』、『古事談』第三、『今昔物語』第十二、『明匠略傳』日本下、『元亨釋書』第四、『東國高僧傳』第六、『本朝高僧傳』第十、『慧心和尚行實』、並に『日本紀略後編』第十二、『扶桑略記』第二十八、『僧綱補任抄出』卷上、『一代要記』第四、『初例抄』卷上を始め、『榮花物語』第二十五、第二十七、『今鏡』第九、『十訓抄』第十、『拾芥抄』下本等に出で居る。今『元亨釋書』に依るに、

僧都諱は源信、俗姓は卜部氏、大和國葛木郡の人、父の名は正親、母は清氏、幼にして叡山に登り、慈慧大師良源に師事し、勵精修學せられた。天性聰明にて、弘く顯密の教を究め、五種法師、四種三昧等薫練せられざるは無かつた。而も壯年を過ぎてからは、榮名を忌ふて、横川に屏居し、專ら著述を業とし、『一乘要決』、『往生要集』等の名著を出された。時人慧心院の僧都、又は楞嚴院源信大師などゝ呼んだ。寛仁元年六月十日(一說長和三年、或は寛仁二年)七十六歳で示寂せられた。僧都が生平の行業は、師が座右の銘である四十一箇條の起請に窺ふ事が出來る。其の起請といふは、拾芥抄には「源信僧都四十一箇條起請」と題し、應に重く禁制すべき條條。一、設ひ心に叶はざる事ありと雖も、思忍で瞋恚を起さず。一、設ひ良緣に遇ふと雖も、堅く思ひ忍で女犯すべからず。一、無慚不信にして徒に信施を受く可からず。一、好て他人の好惡を云ふ可からず。一、身に堪えざるを以て、敢て物を好むべからず。一、聖教の御前にして、無禮を致す可からず。一、念思して妄語を禁ずべし。一、經を讀み奉る間、遲口を以てして、急讀すべからず。一、親疎を論せず、人を恨むべからず。一、可嚀忍俗敢て追從すべからず。一、洛陽常住の思を成すべからず。一、見物を好むべからず。一、病を治すにありと雖も、魚類を食ふべからず。一、惡友と好で交る可からず。一、唯名利の爲に聖教を學ぶと雖も、必ず無上菩提に廻向せよ。一、少々の損ありと雖も、人を疑ふ可からず。一、堂塔に向て不淨を行ふべからず。一、人常に芳心有るべし。一、人群集の處、捐事なきに推參すべからず。一、人の物を借らば早く之を返すべし。一、下人の無禮、見入れ聞入るべからず。一、不慮の外に罪を造ると雖も、作すに隨て卽ち懺悔すべし。一、貧賤にして强て美服美食を好むべからず。一、惡徒の者と雖も、之を打縛るべからず。一、讒言並に中言を信ずべからず。

一、他人の物を借用すべからず。一、親しき間借用すと雖も、早速に之に返すべし。一、全く多言戲笑を斷ずべし。一、人と全く口論を成すべからず。一、朝には讀經、暮には念誦、闕怠すべからず。一、不屑の才智を以て、問答論議を好むべからず。一、知識には結緣すべし。一、立ち乍ら小便すべからず。一、麁食と雖も、嫌はずして食ふ可し。一、行住坐臥滅罪の思を成すべし。一、晝夜常に憶ふ所の善惡の事、善に於て彌增長し、惡に於ては、堅固に之を悔よ。一、乞食來る時、厭ふ無く施を行すべし。一、念誦讀經の間、威儀を闕くべからず。一、亥子寅此の三時寢るべし、自餘は眠るべからず。一、萬事に於て之を覆藏すべからず。一、蟣蝨をだも殺すべからず、況や餘の生類をや。一、諸の功德を見聞し、誹謗を生ずべからず。已上四十一箇條眼精の如くすべし已上とある。

又『續本朝往生傳』の首書に引く所の別傳には、

或人偸問。和尙知行無等倫。薰修行業。何等爲先。答謝。念佛爲先。復問。諸行之中。以理爲勝。念佛之間。觀法身否。答唯唱佛號。復問。何不觀理。答。往生之業。稱名爲足。本自存之。故不觀理。但觀之未爲難。我理觀之時。心意明了。無有障碍。

長和二年正月勘錄。今生薰修之行業。啓白佛前。阿彌陀佛二十倶胝遍。奉讀法華經一千部。般若經三千餘卷。阿彌陀經一萬卷。奉念阿彌陀大呪百萬遍。千手陀羅尼十萬遍。尊勝陀羅尼三十萬遍。及阿彌陀小呪。不動眞言。光明陀羅尼。佛眼等。不知其數。或彫鏤佛像。或書寫經卷。或行布施等之事。種種不一。

亦以て僧都が生前念佛の行業を勵まれた事蹟の一端を摩揣することが出來る。僧都の著書は、『一乘要決』、『阿彌陀經疏』、『大乘對倶舍抄』、『因明四相違注釋』を始とし、其數總して一百餘卷に及び、今日現存するものも尠なくはないが、其の中で最も異彩を放つたものは、永觀年中に選述せられた『往生要集』である。此の名著は、啻に當代に鳴響いた許りでなく、其の後世の淨土敎に與へた感化は非常なものであつた。唐善導作の疏釋との間にあつて、法然上人の淨土宗開立に及ぶ、其の『選擇本願念佛集』の製作の前提をなしたものは、實に此の書である。僧都の學德共に一代を風靡して居たものであることは、改めて繰り返すまでもない。嘗て二十七疑を致した時の四明尊者の驚歎も去ることながら、亦夫の『往生要集』を宋朝に渡した時、彼の國人が僧都の影像に向て、楞嚴院の源信如來と稱したと云ふことも、全然誇張の譚ではないかも知れぬ。僧都が示寂の時に、兜率と西方と兩尊から迎接を受けたといふ『元亨釋書』や『今昔物語』の記事には、幾分附會の說があるにしても、兎も角も僧都が、藤原時代に於ける淨土敎の代表者、指南者として盡された念佛宗の弘通は、其の『往生要集』の

流傳、竝に新案の淨土變相たる來迎圖等の流布と共に、千古不磨の遺芳を今日まで傳へて居るのである。

二、源信中心の淨土教美術　九品往生相、迎接曼荼羅、其の他此の藤原時代に流行せる淨土教關係の新作美術を以て、悉く之を源信僧都の功に歸することは出來ぬ。支那から傳へられた模本もあり、又他の先德に依て始められたものもあらう。而も其の中の大部分は、僧都の力に依るものと云ふて差支ない樣である。現に諸國の古寺に現存する淨土變相にして、其の當麻樣の淨土變(普通に淨土曼荼羅、觀經曼荼羅、又は當麻曼荼羅ともいへり)を始め、三尊又は二十五菩薩來迎圖、二河白道圖等にて、惠心作と云ひ傳へらるゝものは、夥しく澤山あり、其の中には優秀なる古代の作品にして、國寶に指定されあるものも尠くない。此等の諸作物のすべてが、果して僧都の眞作であるや否やの問題は、こゝにて陳辯すべき限りでないが、其等の作物の數が非常に多く、且つそれが皆符節を合せたる如く、僧都の作物と傳へらるゝは、僧都の感化の偉大なるに依るとはいへ、一面には、此等圖像の最初の原作者が實に僧都であつた故であるかも知れぬ。僧都出世以後の我が淨土教美術は、實に僧都を中心として興隆され流行されて居るのである。

『後拾遺往生傳』卷下に載する平維茂の傳には、僧都が維茂の請に依て、極樂迎接曼荼羅一鋪を贈りたることを記し、其の下に「凡我朝迎接曼荼羅流布始于此矣」と云ふて居る。迎接圖の濫觴は、假りに此の時としても、其の餘の二河白道圖等に就ては、確とした文獻の徵す可きものもないが、是れ亦古來の傳說に依て、僧都の創作に係るとする。然らば、翻て僧都は如何なる敎證に本づき、如何にして斯樣な作品を出さるゝに至つたかと云ふことを、僧都の著書にて僧都鼓吹の淨土敎の眞髓を竭せる『往生要集』を本として考ふるに、元來源信僧都は天台の學者であるが、今『往生要集』は、既に全然台家の立場を蟬脫して、純淨土念佛の行者として熱烈なる筆を馳せられて居る。

夫往生極樂之敎行、濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但顯密敎法其文非一。事理業因其行惟多。利智精進之人未爲難。如予頑魯之者豈敢矣。是故依念佛一門。聊集經論要文。披之修之易覺易行。總有十門。分爲三卷。一厭離穢土。二欣求淨土。三極樂證據。四正修念佛。五助念方法。六別時念佛。七念佛利益。八念佛證據。九往生諸業。十問答料簡。置之座右。備於廢忘矣。

と。是れ卽ち此の集開卷の文である。今茲に之を細說する暇は無いが、其の經論の要文を集められたと云ふ。それは如何なる經論疏釋に據られたかと云へば、其は同書

下末のすえに、僧都自から「正しく西方の觀行幷に九品の行果を明すは、觀無量壽經には如かず。彌陀の本願幷に極樂の細目を說くは、雙卷無量壽經には如かず。諸佛の相好幷に觀相の滅罪を明すは、觀佛三昧經に如かず。色身法身の相幷に三昧の勝利を明すは、般舟三昧經、念佛三昧經に如かず。修行の方法を明すは、上の三經幷に十往生經、十住毘婆沙論に如かず。日々の讀誦は小阿彌陀經に如かず。偈を結し總說するは、無量壽經優婆提舍願生偈に如かず。修行の方法は、多く摩訶止觀及び善導和尙の觀念法門、幷に六時禮讚に在り。問答料簡は、多く天台の十疑、道綽和尙の安樂集、慈恩の西方要決、懷感和尙の群疑論に在り。往生人を記するは、多く迦才師の淨土論幷に瑞應傳に在り。其の餘は多しと雖も、要は此に過ぎず」と述べ置かれたに由て、大綱の存する所を推案すべきである。

而して此等の經論疏釋が、僧都により如何に咀嚼せられ、如何に淨土敎の鼓吹に適用せられたかは、『往生要集』其物に充分に竭されて居るが、斯くして僧都に依て綜合せられた念佛の敎、卽ち僧都の腦裡に印せられた極樂往生の思想が、一朝丹靑に移されて、渴仰の本尊像を成さしめたに就きては、如何なる經疏が、如何なる作物に影響して居るであらうか。今こゝには其の重なるものに付き、一往の配當をなし置き、次章に至て、更めて其の細說に移ることゝする。

(一)淨土變相　是は僧都の創意では無く、古く奈良時代から行はれたもの、其の經の本據は『觀無量壽經』等である。

(二)九品往生相九體佛等　是れ亦『觀無量壽經』の經說に本づいたものであることは申すまでもない。或は案ずるに九品往生相等の流行は、彼の『觀無量壽經』に依て畫かれた淨土變相中の外緣の九品往生の圖から別出されたものであらう。

(三)二十五菩薩來迎圖　來迎の事に就きては、『無量壽經』、『觀無量壽經』等が本であるが、二十五聖衆來迎の說は、『十往生經』(具に十往生阿彌陀佛國經といふ)に初めて出でたる說、卽ち源信僧都の此の種の迎接圖の創作は、從來の『觀無量壽經』等の所說と、今の『十往生經』の說とを雜糅して造られたものである。

(四)彌陀尊像、三尊來迎圖　此は彌陀淨土變、竝に迎接圖の簡易にせられたものであるが、慈恩の『西方要決』に「謂造西方彌陀像變。不能廣作。但作一佛二菩薩亦得」あるなどが、該變相の本據を爲して居るものと思はれる。

(五)二河白道圖　二河白道の喩は、善導の『觀經散善義』の說である。卽ち善導の此の疏文に依て畫かれたものである。以上、之を要略して云へば、『觀無量壽經』、『十往生經』、

『西方要決』、及び善導の『觀經疏』等が本據になつて居るが、思ふに僧都をして此の種の作物を出さしめたに就ては『觀念法門』を始めとして、善導の著書が、尤も直接の影響をなしたものである。而して淨土教美術が觀無量壽經美術であると俱に、其が又善導中心、源信中心であること、是れ吾人の大に注意し置くべき現象である。

第八章　源信源空出世以後の淨土教と美術

一、法然上人の淨土宗開立　法然房源空上人が、善導大師の『觀經散善義』に謂ゆる「一心專念彌陀名號」云々の文に依て、專修念佛の法門を開立したるに就きては、惠心僧都の勸化が、與りて大に力ありしものなること、諸傳に記する所である。『徹選擇本願念佛集』卷上に「又慧心先德の往生要集の文を披くに、往生の業には念佛を本となすと云ひ、又慧心の妙行業記の文を見るに、往生の業には念佛を先となすと云へり。覺超僧都慧心僧都に問ひて曰はく、汝が行ずる所の念佛は、是れ事を行ずとやせん、是れ理を行ずとやせん如何と。慧心僧都答へて云はく、心は萬境に遮へらる、是を以て我は但稱名を行ずるなり。往生の業には稱名尤も足る。これに依つて一生の念佛、其の員數を勘ふるに二十俱胝返なり云々。然れば則ち源空も大唐の善導和尚の敎に隨ひ、本朝の慧心先德の勸に任せて、稱名念佛の勤長日六萬返なり。死期漸く近くに依て、又一萬返を加へて長日七萬返の行者なり」と仰せられた上人の御言葉が載せてあるが、上人の立敎開宗の立場は、善導の釋義と惠心の勸進とを依用したもの、言を換へて云はゞ『本朝祖師傳記繪詞』第一に「高倉院の御宇、安元元年乙未齡四十三より、諸敎所讃多在彌陀の妙偈、ことにらうたく心肝にそみ給ければ、戒品を地體として所のこゝに毎日七萬遍の念佛を唱て、おなじく門弟のなかにもをしへはじめ給ける」と云へる如く、傳に依て少しづゝ說の異錯はあるが、若し『法然上人傳記』第一に依れば「然に惠心の往生要集を開見給ふに、此集には、偏に善導の釋義をもて指南とせり。善導の疏には、亂想の凡夫、稱名の行によりて、順次に淨土に生べき旨を判じて、凡夫の出離をたやすくすゝめられたり。とりわきひらき見んと思ひて、別して見ること三遍、前後合て八遍、或詞に一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者是名正定之業、順彼佛願故の文にいたりて、忽に本願の正意稱名にあり、是に過たる善惡凡夫の出離の肝心なしと見立給て、我すでに此道理を得たり、自身の出離におきては思定つ」とありて、上人が善導の疏文を見て、淨土の一宗を開き給ふに至れるは、是れ源信の『往生要集』の指南に依るとするのである。『法然上人行狀畫圖』第六、『拾遺古

德傳』第三等、亦略此の說に同じ。卽ち上人以前に出世せる淨土の疏家は尠からざれども、唯善導の一家、妙に彌陀本願の旨を得、本朝の惠心先德、獨り能く稱名念佛の行を勸め給へるにより、仍て此の二師の意に本づきて、斯くは淨土宗を立て給ふたのである。

法然上人が淨土宗の開祖にして念佛門の元祖たるは、改めて申すまでも無きことなるが、然し乍ら上人をこゝに導いた夫の『往生要集』の撰者惠心僧都の偉蹟は、其の感化や又實に廣大である。蓋し僧都が一代の鴻業たる念佛の鼓吹は、當に當時の同じ念佛行者の諸大德の化導を壓倒し居たるのみならず、其の後代の淨土敎に與へたる德化は、實に非常なるものにて、謂ゆる『往生要集』の製作は、普く念佛の一門に依りて經論の要文を集め、兼て善導の疏意を復演すること尠からざりしが、後遂に法然上人をして此の書に由りて淨土宗開立の發端を搜出し得せしめたのであつた。而して彼の『往生要集』一部十門の釋義は、要するに吾々末世の人々の爲に、往生之業念佛爲本の旨を開示して、淨土往生の勝緣を結ばんことを勸進せるものなるが故に、其の根本精神が念佛勤修を勸むるを以て大綱とせるは勿論なれど、之を法然上人所立の念佛宗に對比する時は、其の間少しく庭徑ありと云はざるを得ず。其の所以は、僧都が念佛の勸化も、主とする所は口稱の念佛なるべきも、同時に又弘く諸經論竝に餘師の說をも遮せぬゆゑ、從て稱名以外の行業を修するも妨難なきこととなり、卽ち稱名念佛を行ずると共に、又種々の善根をも幷せ修するを能事とするに至るのである。之を僧都が一期の行狀に見るも、其の二十億遍の稱名の他『法華經』を讀み奉ること一千部『般若經』三千餘卷『阿彌陀經』一萬卷、阿彌陀の大呪を念じ奉ること百萬遍『千手陀羅尼』十萬遍『尊勝陀羅尼』三十萬遍、及び阿彌陀小呪、不動眞言、光明陀羅尼、佛眼等は其の數を知らず、或は佛像を雕鏤し、或は經卷を書寫し、或は布施等をも行ぜられしと云ふ。然るに法然上人に至ては、偏に善導一家の釋義に依りて、唯口稱念佛の一行のみを以て正行とし、餘師の說を容れず、雜多の行を許さず、厭迄嚴然として稱名本願の大旨を確守し給へり。是れ卽ち上人立敎の眼目にて、而して又『選擇本願念佛集』全卷の眞髓である。其の日常の行化も、自から彼の源信僧都とは異なりて、但念佛のほか誦經造像等其の他一切の事理の善業、悉く廢して行ぜられなかつたのである。

されば惠心僧都は、念佛行者としては、寧ろ法然上人より先覺者にて、且は又上人の指導者なりしが、後上人が愈々自ら一宗を開立するに及びては、偏依善導の旗幟鮮

明に、專修念佛の興行熾盛にして、こゝに新に一家の宗風を起されたのである。卽ち上人が、後代の末徒より淨土の宗祖、念佛の元祖と崇め稱せらるゝ所以は之が爲である。蓋し上人以前に出世し給へる顯密の諸德中、念佛の行者は甚だ尠なくはなく、其の思想も弘く一般に流布されあり、吾々の豫想以上の盛行を致したるが、但し其は聖道顯密の餘習を脫せざる雜修的のものにて、專修念佛ではなかつた。若し夫れ本朝の淨土敎の流行を二大時期に劃するに於ては、法然上人の立敎開宗を起點として、假りに其の以後を一向專修の稱名の流行期とすれば、上人以前は顯密雜修の念佛の興行時代である。而して前期は源信僧都其の敎風を代表し、之と前後して光勝、千觀、永觀、珍海、維範覺鑁、良忍等の諸大德世に出興し、後期は法然上人專念の法門を垂布して、遺弟竝に親鸞、智眞等の諸大龍象之を布演し、以て今日に於ける念佛宗の興隆を爲さしめたり。かゝる前後の二期中にありて、惠心僧都出世の前後に、同僧都以上の念佛の碩德なく、法然上人の開宗以後に、更に上人以上の大德は無い。然れば則ち惠心、法然の二師は、或意味に於て、我國淨土敎の全體を代表するものといふことを得、而して此の二師の化導に就きては、自から互に少しく其の面目を異にする所ありて、卽ち惠心僧都の德化は、寧ろ方便の爲に作られた迎接曼荼羅等に依て、念佛勸進の媒介をなし、法然上人の化益は、驀直に稱名念佛の功德を擧げて、往生極樂の正行とせられた。其の間稍專雜の別はあれ、此の二師の遺化は、綿々として斷ゆることなく、今日も猶ほ行はれて居るのである。

二、我國中古以後の淨土敎美術の種々　却說我國中古以來、此の惠心僧都、法然上人等の先德に依て鼓吹せられたる淨土敎が、當時の文明に及ぼした影響は非常なものであつた。予はこゝに特に美術史上の反影に就きて、聊か其の一端を說明せんと思ふのであるが、猶ほ一言書き添へ置かざる可からざることは、此等の敎が我が美術上に與へた影響は、法然上人よりも惠心僧都の方が、遙に上に位して居る。此は二師の勸化の立脚地の相違より自から然らしむるものなるも、僧都の勸むる所の念佛の敎も、固と概ね善導を指南とせるに依りて、從て其の作物亦觀經爲本、善導中心の傾向を有することである。善導自身が淨土變相を圖畫せしは、史乘に明かなる所、今茲に諸種の迎接相竝に二河白道圖等の製作を見たりとて、別に怪しむ必要はない、唯法然上人に於ては、稱名一點張なりしが故に、上人として直接に影響を與ふることは之れ無かりしも、二祖對面の如き五祖畫の如き上人出世以後新に興つた新作物も尠なくない。左に試に其の主なるものを列記して見よう。

イ、九品淨土　『叡岳要記』巻上常行三昧堂の條に「堂上に金銅の如意寶珠あり、四方に九品淨土竝に大師等の影像を列圖す」と云へるもの、併し乍ら是れ恐くは淨土其の物を九品に配當して畫き分けたるにはあらで、彼の宇治平等院鳳凰堂の板壁及び扉の繪の如く、九品の機類往生の樣をあらはせるものにはあらざりしか。卽ち右鳳凰堂の九品の變相は、『古今著聞集』第十一に「爲成一日が中に宇治殿の扉の繪をかきたりけるを、宇治殿仰せられけるは、弘高は繪樣をかきて一夜なをよく案じてこそかきたりしが、いかにかく卒爾にはかくぞとなん仰せられける」とある如く、當時の繪所長者託摩爲成の畫く所、予等は之に依て當時の九品往生變の繪樣を知ることが出來る。又『榮華物語』第十八玉臺の條に「北南のそばのかた、東のはしゞ〳〵のとびらごとに繪をかゝせ給へり。かみに色紙形をして詞をかゝせたまへり。はるかにあふがれてみえがたし、九品蓮臺の有樣なり。あるひはとし比の念佛により、或は最後の十念のゆゑ、或はをはりの時善知識にあひ、或は戒惠のもの、をこないのしなゞ〳〵にしたがひて、極樂の迎をえたり。これは聖衆來迎かと見ゆ。彌陀如來雲にのりて、光を放て行者のもとにおはします。觀音勢至蓮臺をさゝげてともにきたり給ふ。諸の菩薩聖衆、をんじやうぎがくをもてよろこびむかへとり給」とあるに依るに、是より先き、既に法成寺金堂の扉にも、今と同じ變相が、孰れも八相成道變等と相竝びて畫かれたのであつた。なほ『續本朝文粹』第十二に載する鳥羽勝光明院供養の敦光朝臣の敬白には「四柱に胎藏金剛兩部の諸尊像を圖繪し、四面の扉に極樂九品往生、竝に迎接儀式を圖繪し、佛後壁の表裏に、廿五菩薩幷に極樂九品變像を圖繪す」と云ひ、又『法然上人行狀畫圖』第十五には、慈鎭和尙が貞應三年四天王寺の繪堂を新造したるを記して、其下に「四天王寺の別當に補任せられし時は、大僧正行慶寺務の時顚倒して後、年久しくなりにし繪堂を新造して、漢家本朝の往生傳をえらび、尊智法眼におほせて、九品往生の人を畫圖にあらはし、入道相國（頼實公）以下九人の秀才をすゝめて、和歌を詠じて、九品面々の行狀を稱嘆し、菅宰相（于時藏卿大）爲長卿をして、四韻の周詩を賦せしめ、權大納言敎家卿、色紙形をぞ淸書せられける」と云ひ、具に其の色紙形に書せられた九品の詩歌、竝に色紙形記銘の全文を載錄してある。

ロ、九體阿彌陀　『法成寺金堂供養記』に出せる文章博士善滋爲政作の呪願文に「華洛東西。蓮府近邊。結構仁祠。安置佛像。丈六九體。金色彌陀。脇士二軀。觀音勢至。是則檀主。爲念菩提。誠懇內催。供養先畢」とあるもの。之に就き『榮花物語』第十六本のしづくの條には、「入道殿は御堂のにしによりて、阿彌陀堂たてさせ給て、九體のあみだ佛つくらせ

給て、この三月寛仁四年には供養させ給はんとて、いみじういそぎのゝしりて」と云ひ、同第十八王喜の條には「佛を見たてまつれば、丈六の彌陀如來光明第一なり中略光中化佛無數億にして中略かみはしに、觀音勢至おなじく金色にして、玉のやうらくをたれて、たゝせたまへり。おの〳〵寶蓮華をさゝげ給へり。四天王たゝせ給へり。一佛の御よそひかくの如し。いはんや九體ならばせ給へるほど、心に思ひ口にのぶべきに非ず」と云ひ、又「九體は是れ九品往生にあてゝつくりたてまつらせ給へるなるべし」と云ひ、同第三十つるのはやしの條には「このたてる御屏風のにし、おもてをあげさせ給て、九體の阿彌陀佛をまもらへさせたてまつらせ給へり中略御めには彌陀如來の相好を見たてまつらせ給、御てには彌陀如來の御てのいとをひかへさせ給て、北まくらにしむきにふさせ給へり」とあり。古像の存するもの、山城國淨瑠璃寺に安置せらるゝ丈六の坐像あり。定朝の作と傳へられ、九體共に上品上生の御すがたである。又『安樂院行事』に依るに「彼の通基朝臣、天治年中、更に虹梁の構を揚げ、成風の功を終へ、西方九品聖を安置し奉る。大治五年、遂に供養し齋筵を演ぶ」と云ひ、其の他『百錬抄』第六大治五年七月二日の條には、白河阿彌陀堂の丈六九體阿彌陀佛慶讃の事を傳へ、同天承元年七月八日の條には、鳥羽殿に九體阿彌陀堂を造立して、之を安置したことを記して居る。近くは武藏奥澤淨眞寺の九品佛の如き、亦其の一例である。

八、九品曼荼羅　『長秋記』天承元年七月八日、鳥羽殿跡御堂供養の事を記せる下に「一七間四面廂御堂也。中央一間有。柱繪有。螺鈿佛壇。安置半丈六彌陀。等身二菩薩像。佛後圖。九品曼荼羅繪像。佛師智順筆云々其北面。圖。補陀羅山額後筆云々」と云へり。謂ゆる九品曼荼羅とは、是れ九品淨土繪のことなるや、或は惠運僧都將來の阿彌陀九品曼荼羅に相當するものなりや、未だ深く考へず。今また高野山淸淨心院に珍藏する所のものに、絹本着色の九品曼荼羅圖あり、京都知恩院にも李孟根筆の同九品曼荼羅ありといふも、其の圖樣に就きては、予はいまだ何等聞く所なきゆゑに、こゝには如何とも判斷が出來ぬ。

蓋し案ずるに、彌陀如來九品聖容の圖せらるゝこと、其の由て來る所、既に遠きが如し。善導の『往生禮讃』に「五山の毫獨朗に、寶手印恆に分れたり」とあるは、是れ或は彌陀寶手印契が、各品に從て同じからざることを述べたものかの樣にも思はるゝが、彼の惠運僧都將來の唐本の阿彌陀九品曼荼羅には、華臺上に上品上生の阿彌陀佛を、周匝せる八葉には八品の阿彌陀佛を安置したとある。然れば九品の各尊は、古より一々印相等を同じくせざりしものと見るべきが至當なれども、淨土變相中の外陣

の迎接相を始とし、今の九品淨土繪等、其の圖相は必ずしも一定ならずして、何圖を以て確定的のものと決すべきか、是は仲々の難問題で、『覺禪鈔』佛部阿彌陀の卷、近くは『當麻曼荼羅搜玄疏』第七、『諸廻向寶鑑』第四、『佛像圖彙』第二等に、手印の事を辯じあるも、之がと云ふ定說は見出し得ないのである。

而して若し是等繪像等行はるゝに至りし來由に就きて考ふれば、九品淨土繪は『觀無量壽經』所說の九品來迎の信仰より出でたるものなること勿論なるべきも、繪畫其の物は、淨土變相の外陣の九品往生の處の一部分が、單獨に流傳さるゝに至りしものとも思はれる。九體阿彌陀は、彼の『榮華物語』の說の如く、九品往生にあてゝ、九體の尊像を安置し給へるものなるは、疑を容れざる所、九品曼荼羅に至ては、是は唐土流布圖の請來品である。

二、阿彌陀三尊　『本朝文粹』第十三所載、大江匡衡の『爲盲僧眞救供養卒都婆願文』に「茲に因て弟子、一心を致し、衆力を合し、十三基を造立す、三面あり。一面に阿彌陀佛、觀音、勢至各一體を圖し奉り、一面に阿彌陀佛、地藏、龍樹各一體を圖し奉り、六體の佛菩薩を以て、蓋し六道に當つ。一面は阿彌陀等を圖し奉る」と云ひ、右中辨爲親記、久壽二年十二月十四日の條に「遠忌に依て仁和寺阿闍梨の房に向ふ、佛事恆例の如し、但し阿彌陀の三尊は、予の圖繪する所なり」といひ、又『法然上人行狀畫圖』第二十七にも、熊谷入道蓮生の往生の事を記せる下に「四日の夜に沐浴して、やうやく臨終の用意をなす。諸人また群集すること盛なる市の如し。すでに巳の刻に至るに、上人彌陀來迎の三尊、化佛菩薩の形像を一鋪に圖繪せられて祕藏し給けるを、蓮生洛陽より武州へ下けるとき、給はりたりけるを懸奉りて、端坐合掌し、高聲念佛熾盛にして念佛と共に息とゞまる」とあり。

阿彌陀三尊と云はゞ、通途彌陀、觀音、勢至の三尊を稱すること勿論なるが、之を畫圖彫刻に現して禮拜するに至れるに就ては、慈恩大師の『西方要決釋義通規』に「謂はく西方彌陀像變を造るに、廣く作ること能はざれば、一佛二菩薩を作るも亦得」といへるが、其の本據を爲したものであらう。

ホ、迎接曼荼羅　『後拾遺往生傳』卷下平維茂の傳に云はく、「彼壯年の時より、常に惠心院の僧都源信に謁して、往生の扶持を望む。僧都承諾して專ら其の志を存す。而る間、漸く暮年に及で、屢〻病氣あり。已に危急に及び、僧都に告げて曰はく、比年の約言は臨終の勸進なり、今正に其時なり、必ず光臨を待つと云ふ。時に僧都、極樂迎接曼荼羅一鋪を贈て、之に報ふ。年來の約に依て、知識の契ありと雖も、自他相障て歩を投ずる

こと能はず、唯此の曼荼羅に對して、往生の觀を成すべしと云ふ。凡そ我朝迎接曼荼羅の流布此に始まる」と。又增鏡第九に「中に繪像の阿彌陀、餘五將軍維茂の臨終佛なりけるを、惠心僧都、傳へられたりけるをもたせ給うて供養し給」とあり。思ふに臨終に來迎圖を安ずるは、此の時を以て濫觴とし、圖像の製作も、此の時を嚆矢とするのであらう。さり乍ら文言簡單にて、其の圖相の如何なるものなりしかを推案するに由なきも、其は要するに、『觀無量壽經』等所說の行者迎攝の意趣に本づき、九品往生淨土の一相を採り來りて、具に聖衆來迎の有樣を畫かれたものに相違ない。

へ、廿五菩薩來迎　敦光卿の鳥羽勝光明院供養の敬白に「佛の後壁の表裏に、廿五菩薩像、幷に極樂九品變像を圖繪す」と云ひ、『吾妻鏡』第五文治元年十月十一日の條に「御堂の佛後壁の畫、彩色の功を終ふ。圖し奉る所は、淨土瑞相幷に廿五菩薩像なり」と云へるもの。遺作の優秀なるものには、惠心僧都の筆と傳へらるゝ三幀の大圖像あり。元は山門別所安樂谷の所藏、今は高野山巡寺八幡講組合大圓院外二十二箇寺の共有物にて、本邦佛畫中の最大至寶とせらる。此の畫圖、天正十五年修復の時に記したる裏書に依れば「叡岳別所安樂谷大阿彌陀尊像二十五菩薩、同山越三尊化佛等、以上卅三體、惠心僧都廿四歲秋眞筆」とあり。是れ卽ち惠心僧都二十四歲の時の作となす。

之を鑑賞するもの、亦多く當代の遺物とし、僧都壯年時代の筆とするに、大體に於て異義なきが如し。されど飜て『後拾遺往生傳』の記事を考ふるに、僧都の壯年時代に、既に斯の如き大迎接曼荼羅の製作ありきとするは、少しく事實に符合せぬこと、なる。結局は右來迎圖裏書の傳說が、絕對に信用を置き難しと云ふことに歸着するのである。

蓋し阿彌陀佛が聖衆を率ひ給ひて念佛の行者を迎接し給ふとの說は、『觀無量壽經』を始め諸經に說示さるる所なるが、特に之を二十五菩薩とするは、『十往生阿彌陀佛國經』にて、卽ち同經に「若し衆生あり、深く是の經を信じ、阿彌陀佛を念じ、往生を願ぜば、彼の極樂世界の阿彌陀佛は、卽ち觀世音菩薩、大勢至菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、普賢菩薩、法自在菩薩、獅子吼菩薩、陀羅尼菩薩、虛空藏菩薩、德藏菩薩、寶藏菩薩、金藏菩薩、金剛藏菩薩、山海慧菩薩、光明王菩薩、華嚴王菩薩、衆寶王菩薩、月光王菩薩、日照王菩薩、三昧王菩薩、定自在王菩薩、大自在王菩薩、白象王菩薩、大威德王菩薩、無邊身菩薩を遣はし、是二十五菩薩、行者を擁護す」と云へもの、其の本始である。此經は疑僞經の一に算せらるゝに拘はらず、古來諸家の間に屢々引證せられ、殊に惠心僧都の如きは、尤も盛に之を引載せり。其の二十五尊の歷名の如き、今の『往生要集』を始め『覺禪鈔』等

にも夙に援用せられたるが、同じ惠心僧都の作と傳へらるゝものに迎接讃あり、今全文を得ずと雖も、西譽の『當麻曼荼羅疏』第三十五に、因に此等の菩薩の持物を言はゞ、觀音紫臺を寄する時、我性の蓮あらはれぬ。勢至の金剛合掌に、轉法輪も近づきぬ。藥王菩薩の幢幡は、不老不死とひるがへる。藥上菩薩の玉の幡、住行向地の露をたる。普賢大士は幡蓋を、恒順衆生と指し覆ふ。六情根の罪滅し、十方界の色を見る。寶自在の歌舞の足、等覺一轉とぞ上る。師子吼菩薩の腰鼓の手、入于妙覺とぞ遊ぶ。陀羅尼菩薩の舞臺にて、下化衆生と踏み靜め。虛空藏の舞の臂、上求菩提と指しかざす。德藏菩薩の笙の音、十八不共の聲高く、法藏菩薩の笛の聲は、三解脫門の風清し。金藏菩薩の箏のこと、三十七品あらはれぬ。金剛藏の琴の音は、四十二字門清み渡る。光明王の琵琶の撥、四河吸魔の緒を振ふ。山海慧の箜篌の緒は、寂靜眞如の理を調ぶ。華嚴王の鉦の音、法界唯心聲澄みて。衆寶王の鐃をもち、一實界を讃嘆す。月光王のふり鼓、心月輪を響かして。日照王の擊鼓にて、四土不二とかき合す。三昧王の捧形は、十界十如を歌詠す。定自在王の大鼓は、平等大會と打鳴し。大自在王の花幢は、畢竟空に指し聳へ。白象王の寶幢は、第一義天に飜り。大威德王菩薩の曼珠の說法圓にて。無邊身の香はまた、供養界蘊滿にけり。但し此の如き持物の次第は、經論の本文を見ず。且らく是れ慧心先德迎接讃に記する所に依るなり。但し此等の持物は、來迎の時の形相なり」と云へり。此等の二十五菩薩來迎圖は臨終佛として、尤とも盛に行はれたるもの、今も猶ほ坊間に流布する所尠なくない。

又此の廿五聖衆來迎圖中に、比丘形の菩薩が在すが、此は地藏、龍樹の二尊と云ふ。然らば其は唐土に於て信仰せられた阿彌陀の五佛から導かれた思想である。而して猶ほ一歩進めて此等の迎接圖を考ふるに、惠心僧都は、果して此の如き廿五聖の迎接圖を造り、なほ迎接讃を製せられたるか、若し製作せられたとすれば異論はなきも、こゝに予が今得たる所の史料のみにては、聊か判斷に苦まざるを得ぬ。夫の安樂谷所傳の大變相の如きも、名は二十五菩薩來迎圖として傳へらるゝも、實は一佛二十七菩薩三比丘在せり。宇治の鳳凰堂內陣欄間の聖衆像を始め、他の異相の聖衆來迎圖等を併せ考ふるに、二十五聖を局り、一々持物に依て尊名を記するに至れるは、僧都よりは少しく時代を後にせずやと疑はれるのである。

ト、山越阿彌陀　京都黑谷金戒光明寺に山越阿彌陀三尊の圖あり、其の色紙上に荔子天台僧源信正曆甲午歲冬十二月謹圖云云の記あるもの。同永觀堂禪林寺にも同じく山越阿彌陀如來圖ありて、亦惠心僧都の筆と傳へらる。此の二圖共に頗る名畫な

れども、惜らくは僧都當時の作物には非ずと云ふ。又安樂谷に於ても、同僧都筆の同山越阿彌陀三尊圖を傳えたること、二十五菩薩來迎圖の裏書に記する如し。又『宣胤卿記』永正十六年五月九日の條に「入道前内府所持の半身阿彌陀畫像之を借て書寫する事、光信朝臣に仰遣はす。此は本と天王寺西門腋壁の惠心僧都の圖像より之を寫す云云。十九日番匠を召寄す、本尊臺衝立障子を作らしむるなり。二十一日阿彌陀の下繪を衝立障子に張付け、光信朝臣を遣はす。二十八日衝立障子阿彌陀繪出來、繪所土佐光信朝臣之を書す。今日五十疋（先日三十疋遣之）之を遣はす。臨終の時枕に立つ可き料なり、裏は不動明王を書せしむ、臨時の魔障を降伏せしむる爲なり」とあるもの、亦此の類の畫圖に非らざりしか。思ふに僧都眞筆の山越尊なるもの、今日に於て之を求索せんは恐らく困難なるべきも、同圖樣の變相、悉く之を同僧都筆と傳へらるに依るに、此の變相もまた元と僧都の創意に出で、後世これを轉寫せしものと考へられぬでもない。

『佛像圖彙』第二には、此の尊像の緣起に就きて「傳へ聞く叡山横川の嶺上に、彌陀尊容現はれ玉ふ時、源信僧都これを拜み、則ち絹の御袖に圖し留め玉へり。委くは横川慧心院に其の寫し玉へる繪像竝に緣起あり」と云へど、其の史實は確實なる紀傳の徵すべきものなし。而して予は此の變相を拜するごとに、是れ亦僧都の作と傳へらるゝ來迎和讃の中に云ふ「見れば緣の山の端に、光雲遙にかゞやけり。此時身心やすくして、ねんぶつ三昧現前し。毫光わが身を照して、無始の罪障消めつす。光雲漸く近づきて、瞻仰すれば阿彌陀尊、相好圓滿したまひて、金山王の如くなり」云云の文の幽韻を憶ふのである。此の山越阿彌陀三尊も、圖相こそ單純なれ、實は迎接變相中の一相たることは、改めて說明するを要せぬことであらう。

チ、十體阿彌陀　京都知恩寺の什寶、十體の彌陀の尊容を圖する故に其の名あるもの。藤原紀末の遺作ならんと云ふ。經軌の依據詳かならざるも、或は是れ九品淨土繪の一異相として、九品の聖容に併せて、本身一體を添へ奉りしものならざるか。

リ、二河白道　『本朝畫史』に「惠心院僧都、諱は源信、姓は卜氏、和州の人、洛東新黑谷に二河白道圖屏風あり、蓋し上古の風致なり」など云へるもの。今山城國粟生光明寺に絹本着色の古圖を珍藏す。亦傳へて惠心僧都の筆と云ふも、實は鎌倉時代の逸品なりとのことである。此の圖も亦或は僧都の創意に出で、後代に傳はれるものか否か。圖相の據る所は、善導の『觀經正宗分散善義』に云ふ「譬へは人有りて、西に向て百千の里を行んと欲するに、忽然として中路に二河あるを見る。一は是れ火河南に在り、二

は是れ水河北にあり。二河各闊百歩、各深くして底なく、南北邊り無し。水の中間に正りて、一の白道あり、闊四五寸許なる可し。此の道東岸より西岸に至まで、亦長さ百歩。其の水の波浪、交過ぎて道を溼し、其の火燄亦來て道を燒く。水火相交はりて常に休息なし。此の人既に空曠迥なる處に至るに、更に人物なし。多く羣賊惡獸ありて、此人の單獨なるを見て、競來て殺さんと欲す。此の人死を怖れて、直に走て西に向ふに、忽然として此の大河を見る。卽ち自ら念言すらく、此の河南北は邊畔を見ず、中間に一白道を見れども、極て是れ狹小なり。二岸相去ること近しと雖も、何に由てか行くべき、今日定めて死なんこと疑はず。正に到り廻らんとすれば、羣賊惡獸漸々に來り逼む。正に南北に避け走らんとすれば、惡獸毒蟲來て我に向ふ。正に西に向て道を尋て去んと欲すれば、復た恐くは此の水火の二河に墮ん。當時の惶怖復た言ふべからず。卽ち自ら思念すらく、我今廻るも亦死し、住するも亦死せん。一種として死を免れずは、我れ寧ろ此の道を尋ねて、前に向て去ん。既に此の道あり、必應に度るべしと。此の念を作す時、東岸に忽人の勸る聲を聞く、仁者決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無らん、若し住せば卽ち死せんと。又西岸の上に人ありて喚で言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。衆て水火の難に墮んことを畏れざれと。此の人既に此に遣り彼に喚を聞て、卽ち自ら身心を正當にして、決定して道を尋ねて、直に進で疑怯退の心を生せず。或は行くこと一分二分するに、東岸の羣賊等喚で言はく、仁者廻り來れ、此の道嶮惡にして、過ることを得じ、必ず死せんこと疑はず、我等衆て惡心をもて相向ふ無しと。此の人喚ぶ聲を聞くと雖も、亦廻顧せず。一心に直に進で、道を念じて行くに、須臾に卽ち西岸に到て、永く諸難を離る。善友相見て慶樂已むこと無きが如し。此は是れ喩也」云々の文にて、圖は今現に淨土宗等に於ては、二祖對面圖と共に、宗意相傳の會座に用ゆる所のものである。

又、淨土五祖『法然上人行狀畫圖』第六に「震旦に淨土の法門をのぶる人師おほしといへども、上人唐宋二代の高僧傳の中より、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五師をぬきいでゝ、一宗の相承をたて給へり。其の後俊乘房重源入唐の時、上人仰せられていはく、唐土に五祖の影像あり、かならずこれをわたすべしと。これによりて、渡唐の後、あまねくたづねもとむるに、上人の仰たがはず、はたして五祖を一鋪に圖する影像を得たり。重源いよ〳〵上人の內鑑冷然なることを知る（中略）いま上人さきだちて淨土の宗義をひらき給ひ、後に重源入唐の時、かの影像をわたすべきよしを命ぜられ、わたすところの影像、上人の仰にたがはざること、豈奇特にあらずや。されば道俗貴賤か

の五祖の眞影を拜して、いよ〳〵上人の德に歸し、ます〳〵念佛の信をふかくしけり。當時二尊院の經藏に安置するは、かの重源將來の眞影なり」といへるもの。其の謂ゆる重源將來のものは、今現に二尊院に珍藏す。或は知恩院に藏するもの、彼の將來圖なりとも傳ふ。蓋し五祖影像の將來は、此の時を以て最初とすべしと雖も、爾來弘く淨家の間に行はれしものにて、鎌倉光明寺には、嘉元第三乙巳林鐘中五月終功畢」の奥書ある淨土五祖畫卷一軸を藏せるが、此は五祖の繪傳である。又倭錦には「土佐光重。淨土五祖草紙。詞行俊卿」と云ひ、同じく五祖繪圖畫の事ありしを傳へて居る。

ル、淨土變相　智光の變相と云ひ、法如の變相と云ひ、共に奈良朝及び其の以前より行はるゝものなるが、爾來變相の傳寫引き續き流行し、就中法如變尤も盛に世に行はれたりき。殊に鎌倉時代法然上人出世以後に於て、一層其の流布を弘くせる如く、卽ち法如變の摹寫たる當麻樣と稱せらるものにて、淨土曼荼羅、觀經曼荼羅、或は當麻曼荼羅と呼び、遺品の名作殘存するもの尠なからざるを見る。彼の鎌倉光明寺に傳ふる住吉慶恩筆の『當麻曼荼羅緣起』の製作の如きも、其は本曼荼羅の流布に伴ふ一反動とも見ることが出來る。又『法然上人行狀畫圖』第三十に依るに、「建久二年の比、上人を請じて、大佛のいまだ半作なりける軒の下にて、入唐の時渡し奉れる觀經の曼荼羅、ならびに淨土五祖の影を供養し、又淨土の三部經を講せさせ奉りける」とあり。彼の將來圖と傳ふるもの、今知恩院に藏せるが、後代此の變相を指して善導曼荼羅と稱するものあるも、若し善導作の淨土變を指定せよとならば、寧ろ法如の變相こそ、却て其の選に與る可きものである。

ヲ、二祖對面　『本朝祖師傳記繪詞』第一に「唐善導和尙、もすそよりしもは、阿彌陀如來の御裝束にて現じて、さまざまの事をときてをしへ給ひける」と云ひ、增上寺藏殘缺『法然上人繪傳』卷下に「安元元年、御とし四十三より、毎日七萬遍の念佛をこたりなく勤め給。また門弟にもこの行をさづけらる。道俗にもおなじくこれをすゝめ給。それよりのち善導和尙御こしよりしもは金色にて、夜な〳〵きたりたまひて、のりをとき給を、繪師にあつらへて、影像をうつしとゞめ給けり」と云ひ、『法然上人傳記』第一下にも「自身の出離におきては思ひ定つ、他の爲に此法をひろめんとおもふ所存の義、佛意に叶や不叶やと思ひわづらひて、まどろみ給へる夢に、紫雲たなびきて日本國に覆、雲の中より無量の光を出す。光の中より百寶色の鳥とびきたりてみちみてり。又高山あり、げん所にして西方にむかへり。長河あり、洪汗として邊畔なし。峰のうへには紫雲そびき、河原には孔雀鸚鵡等の衆鳥あそぶ。雲の中に僧あり、上は曇染、

下は金色にて、半金色の衣服なり。上人問て宣く、これは誰にかあると仰られければ、答て宣く我はこれ善導なり、汝專修念佛の法をひろむる故に、證となならんが爲に來れるなり」とあるもの。『源空上人私日記』、『十六門記』、『拾遺古德傳』第四、『法然上人行狀畫圖』第七等にも亦此の記事あり。特に『行狀畫圖』には「畫工乘臺におほせて、ゆめに見るところを圖せしむ。世間に流布して、夢の善導と云へるこれなり。その面像、のちに唐朝よりわたれる影像にたがはざりけり」の記事あり。其の圖は『本朝祖師傳記繪詞』を始め、『行狀畫圖』其の他の諸傳に圖繪せられあるのみならず、弘く宗內に單行せられて居る。

ワ眞影竝に行狀畫　『法然上人行狀畫圖』第八に「上人の弟子勝法房は、繪をかく仁なりけるが、上人の眞影を畫きたてまつりて、其の銘を所望しける」といひ、同第十に「後白河法皇、勅請ありければ、上人法住寺の御所に參じたまひて、一乘圓戒をさづけ申されけり（中略）御信仰のあまり、右京權太夫隆信朝臣におほせて、上人の眞影を圖して、蓮華王院の寶藏におさめらる」と云ひ、同第三十七桑原左衞門入道の事を記せる下に「これ上人御敎誡のゆゑなりとて、報恩の爲に眞影をうつしとゞめたてまつれり。そのこゝろざしを感じて、上人みづからこれを開眼したまふ（中略）件の眞影を知恩院へ送たてまつる。當時御影堂におはします木像これなり」と云ひ、同第四十三湛空の事を記せる下に「上人遷謫のときも、配所までともなはれけるが、御かた見のためとて、船のうちにて、上人の眞影をはりたてまつらる。船のうちのはり御影とて、當時二尊院の塔にましますこれなり」と云ひ、同第四十八に「空阿彌陀佛は、上人をほとけのごとくに崇敬し申されしかば、右京權大夫隆信の子、左京大夫信實朝臣に、上人の眞影をかゝしめ、一期のあひだ、本尊とあふぎ申されき。當時知恩院に安置する繪像の眞影すなはちこれなり」と云へる、既に上人在世當時、其の眞影の崇敬されしを知るべく、滅後に至ては、一層盛に流布せられしことは、『法然上人傳記』第九下に「誰の人か太上天皇に眞影をうつされ奉るや（中略）誰の人か人每に影像を留めて本尊とするや」とあり。『本朝祖師傳記繪詞』、『拾遺古德傳』にも、此の記事を出せるが、以て眞影の流布の事實を察すべきである。また上人に關する傳記繪詞等の製作流傳に就きては、山城高山寺の『華嚴宗祖師繪傳』、大和唐招提寺の『東征傳緣起繪』等の寫傳と相竝で、他の祖師繪詞類と俱に世に流布されしものゝ如く、現存する上人の行狀畫としては、『法然上人行狀畫圖』正副二本、殘缺の『法然上人繪傳』、竝に『本朝祖師傳記繪詞』、『拾遺古德傳』等、普く人口に繪炙する所の珍什である。

而して以上列記する所の淨土教關係の古美術に對して、悉く之を惠心僧都竝に法然上人の淨土教の鼓吹に本づくとは云べからざるも、併し乍ら其の十中七八は直接間接に此の二先德の勸化の次第を蒙りて、世に流傳さるゝに至りしものなることは事實である。あゝ二師の德化の廣大なるは、今更稱說せず、其の我が中古以後の文明史上否其の藝術史上に與へたる影響も亦大なる哉。

第九章　近世に於ける淨土曼陀羅の製作竝に研究

一、鎌倉時代以後に於ける淨土變相の製作流傳　鎌倉光明寺、京都禪林寺、敦賀西福寺等に、優秀なる淨土曼陀羅がある。其の中には、或は惠心筆等と傳へられるものもあるが、大抵鎌倉時代以後の作である。思ふに大和當麻寺の淨土變相が、鎌倉時代以後に至つて、遽に弘く天下に流布するに至つたのは、是れ全く西山證空上人の功であるらしい。卽ち上人製作の『當麻曼陀羅注』に依るに、上人、當麻寺僧見阿の勸に依て、彼の寺所藏の變相を見るに至れる次第を記し、其の下に、

卽引率上足弟子二十五人。而參詣彼當麻寺。靜拜此變相。是非觀經曼陀羅。卽憶識善導和尙觀經疏四卷文義。震旦和尙觀經疏與日本生身彌陀所織顯曼荼羅文義一同。而一分無所違。是誠權化之所作也。都非凡夫境界。故老淚難禁。遂卽寫其變相。注其法門。

と云ふて居るが、西譽の『當麻曼陀羅疏』第八には「法然上人御弟子小坂の善惠上人と云ふ者、曼陀羅を移し奉る可きの志之れ在り、宇津宮の實相房と相議し候。于時當麻寺の衆僧曰はく、寺僧より外に之を許す可からずと返事あり。于時上人、寺役を勤め、供僧に列り、意の如く曼陀羅を移さる。此の時御衣絹無れば、後鳥羽院の御后宜秋門院（九條殿嫡女）御願として、手自ら蓮糸を繰り取て、常糸に副へて御營みあり。茲に善惠上人、宇津宮の實相房と相議して、大畫師播磨法眼澄圓に仰せ付て之を書かしむ、是れ卽ち第二轉の曼陀羅なり。此の曼陀羅は、善惠上人九條殿の御沙汰として、嘉禎三年丁酉九月の末に、上人弟子觀信房を副へ奉り、信濃國善光寺へ進せらる。善光寺より曼陀羅を御迎に參りし僧二人之れ有り、小將阿闍梨と權智房となり。此れ人王八十六代の帝四條院（秀仁）治天第五年なり。其の後又善惠上人、一幅を移して當麻寺西龍御殿に安置し奉る。是れ則ち第三轉の曼陀羅なり。其の後亦一本を寫して宇津宮の神宮寺に納め奉る。次に又實相房を施主と爲して、四分一曼陀羅を巧出で、遂に下國の

後大羽の往生寺に一宇の大坊を建て、其の曼陀羅を本尊と爲し奉る。其の後又善惠上人此く計り殊勝の靈像を諸國萬人に拜ます可しとて、六十餘州に一國一鋪宛の願を起し、之を書せんと欲して、而も十三鋪書き立て、都の彼此の道場に之れ在りと聞ゆるなり。剩へ印板を開て摺寫して日本大唐まで之を弘め給へり。其の印板の隨一は、智恩院に安置せらる。但し恨くは近年燒失云々、其の後人多く擧げて之を移し安置し奉る故なり。之に付て本曼荼羅竝に第二轉第三轉まで同じく方一丈五尺なり、其の後は人力に依て大小意に任せて之を移す、四分の一の曼荼羅は方七尺五寸なり。此の數量を數ふるに、六分の一、八分の一なんどに之を書き奉て、大小長短替ると雖も、佛菩薩の數、依正二報の莊嚴は、何れも替ること無きなり」とある。此等の記事は、全部史實として認むべきや否や詳ならざるも、兎も角も證空竝に其の門流に依りて、轉々流布されしを、足利時代より西譽上人已下鎮西門流の淨土宗の間にも弘く流行するに至れるものであることは略推測せらるゝのである。

二、新作の淨土曼陀羅　智光、當麻、清海の三變相の他に、近代人師の間に新に案出せらるゝに至つた曼陀羅がある。即ち大經曼陀羅、小經曼陀羅等の類である。

イ、大經曼陀羅　當麻曼陀羅、清海曼荼羅が、俱に『觀無量壽經』に依て畫かれたるに對して、此は『無壽壽經』に本づきて、中央內陣には、釋尊が對告衆阿難竝に同會の聲聞菩薩衆に對して說法し給ふ相を現はし、四方の外陣には、阿彌陀如來因位の發願、五劫思惟、成佛得道の因緣より、三輩往生、乃至五痛五燒に至る一部始終の相を圖出したものである。

ロ、小經曼陀羅　此は『阿彌陀經』に本づきて、中央內陣には釋尊、對告衆舍利弗竝に同會の聲聞菩薩衆に對して說法し給ひ、其の周圍を旋繞して六方諸佛、各舌相を出して證誠し給ふの相を圖し、其の外陣の三方には、極樂の莊嚴、往生の瑞相等を畫き現したものである。

ハ、選擇曼陀羅　此は淨土宗祖法然上人の撰述に係る『選擇本願念佛集』一部十六章の要旨を畫圖に現はしたものである。

而して此等の曼陀羅は、孰れも最近德川時代になつてから製作さるゝに至つたもので、別に特筆す可きものでは無いけれども、孰れにしても、淨土變相の流行が、かゝる新曼陀羅の製作を促かすに至つたかと思へば、何となく趣味深く感ぜらるゝのである。

三、近代に於ける淨土曼陀羅の研究并に其の著書　西山派證空上人が、當麻寺の淨

土變相を轉寫流布し、同時に『當麻曼陀羅註』十卷を著はして、之が曼荼羅の相儀を開講せられて以來、一派の祕要として相傳せられ、從て之に關する抄記も尠なく無い。淨金剛院道觀の『當麻曼荼羅緣起鈔』一卷、摠持寺明秀の『當麻曼荼羅註記鈔』十卷、栗生光明寺舜叔宏善の『當麻曼荼羅聚集聞書』十卷、舜空の『當麻曼荼羅註聚集首書』七卷、顯忠の『當麻曼荼羅顯忠記』等、皆斯學の名著である。鎭西派では、此の淨土變相のことを矢釜しく云ひ出したのは、增上寺の開山酉譽上人で、前に援引した『當麻曼陀羅疏』が最初である。其の後袋中庵良定已後、德川時代になつてから、多くの研究家を出す樣になつた。『蓮門類聚經籍錄』卷下曼陀羅讚述類の條には、四十餘部の著作の名を列ねてあるが、其の中良定の『當麻曼陀羅白記』十二卷、入信院義山の『當麻曼陀羅述弃記』四卷、稱往院酉阿の『綱目祕決鈔』九卷、阿彌陀寺大順の『當麻曼荼羅搜玄疏』八卷などは、皆良著である。尙ほ此の外智光曼荼羅、淸海曼荼羅其の他の解說書として、良定の『淨土最初曼陀羅略記』一卷、『淨土第三曼陀羅略記』一卷、光明寺觀徹の『智光曼荼羅合讚』一卷、『淸海曼荼羅合讚』一卷、緣山隨天の『大經曼荼羅開壇記』四卷、法興院秀典の『彌陀經曼荼羅圖』竝に大順の『善導曼荼羅合讚』一卷、四休菴貞極の『迎接曼荼羅拾穗鈔』三卷などがあり、此の種圖像の研究に資する所尠なくないのである。

上來我が國に於ける關係の美術に就きて、其の變遷流傳の大[illegible]を說明したが、元來此の小篇は、唯簡單に其の歷史的事實を述ぶるのを主眼としたので[illegible]圖相の說明等は、全く之を度外に置いて解說を加ふる餘裕も無く、極めて不備なものになつて居る。且つ說明とても、予が隨時折に觸れて、特別に調査もせずに、筆に任せて書いたものであるから、脈絡も無く杜撰を極めて居るが、兎も角も、之に由て、淨土敎竝に之に伴ふ信仰的作物が、我國上古より今日まで一貫して流傳されて居たものである事實の說明丈は出來た積である。

若し猶ほ一歩進んで、是等作物の內容研究に入り、一々の圖像等に就き、彼此對照して攻究したら、多少とも面白い成果を收め得らる可き筈であるけれど、今は其の餘裕も無き事ゆへ、更に後日の研鑽を期する考である。

思ふに我が國の佛敎美術を、假りに顯敎及び密敎の二種に分けるとすれば、其の淨土敎關係の作物は、其の顯敎中の大部分を占むる次第である。同じ顯敎中でも、藥師、彌勒、觀音、地藏等の信仰も、可なり盛に流行されて居らぬでもないが、就にしても彌

陀の信仰程には普遍されて居ない。卽ち彌陀淨土敎の信仰が、古來深く我が國民の思想界を支配し、其の信仰上の遺物が、我國藝術史上、頗る重要な位[illegible]を占め居るものなることは、何人も認めざを得ざる所の事實であるから、猶[illegible]らの餘地を澤山に殘して居る不完全極まる此の一小稿も、時に何等かの[illegible]、資する所あらうと思ふて、此に收錄した次第である。幸に予が疎漏を寛[illegible]れんことを。

大正五年十一月三十日印刷
大正五年十二月五日發行

佛教學叢書第貳編佛教之美術及歴史

正價金五圓

著作者　小野玄妙

發行者　東京市小石川區林町二十番地　中堀留吉

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　鈴木豐吉

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　京印刷株式會社

發行所　東京市小石川區林町二十番地　佛書研究會

不許複製

大賣捌所

東京日本橋　武揚堂　京都寶文館　岡山謹舍
同神田　東京堂　同寺町　春和堂　金港堂
同本郷　誠進堂　同木屋町　貝葉書宮　小野澤書店
同京橋　北隆館　同寺町　文歌山本町　津田書店
同京橋　目黒支店　同鳥取東町　久松堂
同小石川　雞聲盆館　名古屋　星野文星堂
同本郷　森江書店　飛驒高山　住伊書店
同神田　海堂　久留米　菊竹書店

324
422

終